

佐賀県文化財調査報告書第32集

佐賀県鳥栖市所在

本川原遺跡

—第2次調査—

佐賀県教育庁文化課

建設省佐賀国道工事事務所
佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第32集

佐賀県鳥栖市所在

本川原遺跡

—第2次調査—

建設省佐賀国道工事事務所
佐賀県教育委員会



本川原遺跡 第6号住居址

まえがき

九州高速自動車道の鳥栖インターチェンジが昭和49年4月に開通し、鳥栖市の流通拠点都市としての重要性が益々高まりつつある今日増加する自動車交通緩和のため、一般国道3号の鳥栖インターチェンジと国道34号との分岐点の間の拡巾及び、この交差点の立体化の事業を推進することが急務となってまいりましたので、昨年度に引続きこの地区の埋蔵文化財調査を佐賀県教育委員会に依頼しましたところ、心よく引受けて頂き、その調査成果として本報告書を発行する運びとなった次第であります。

調査の結果を見聞しますと、昨年度の方形周溝墓の発見に続いて今回は特色ある住居址が確認され、その構造が明らかにされたことは実に意義深いことであったと存じます。その意味でこの小冊子が郷土史の研究資料として活用されれば幸甚であります。

なお、この遺構の保存については調査委員会及び県教育委員会の御意向に基づき、覆土による埋設保存を行うように致しました。末尾になりましたが、本調査に御協力頂いた関係各位、ならびに、本報告書に執筆頂いた各位に対し厚く御礼申し上げます。

昭和50年2月1日

建設省佐賀国道工事事務所

所長 米村 信幸

も く じ

まえがき

I	本川原遺跡の調査経過	1
II	本川原遺跡の環境	3
	1. 地理的環境	3
	2. 歴史的環境	3
III	本川原遺跡の遺構と遺物	10
	1. 遺構の概要	10
	2. 住居址	13
	(1) 第6号住居址	13
	(2) 貯蔵穴	20
	(3) 第7号住居址	22
	(4) 第8号住居址	23
	(5) 第9号住居址	24
	(6) 第10号住居址	24
	3 土 城	24
IV	結 語	26

挿 図 目 次

口絵 本川原遺跡第6号住居址

1. 本川原遺跡の周辺図	2
2. 袖比田代公園出土甕棺実測図	3
3. 神辺遺跡出土遺物実測図	4
4. 神辺遺跡遺構実測図	5
5. 神辺古墳実測図	6
6. 神辺古墳出土遺物実測図	6
7. 庚申堂塚古墳墳丘実測図	7
8. 剣塚前方後円墳墳丘実測図	7
9. 本川原遺跡地形測量図	9
10. 第1号方形周溝墓実測図	10
11. 第1号方形周溝墓断面図	11
12. 第1号方形周溝墓（溝内）出土土器実測図	11
13. 第5号住居址出土土器実測図	11
14. 第5号住居址実測図	12
15. F区遺構配置図	14
16. 第6号住居址実測図	15
17. 第6号住居址小路断面図	16
18. 第6号住居址出土土器実測図（1）	18
19. 第6号住居址出土土器実測図（2）	19
20. 貯蔵穴実測図	20
21. B区遺構配置図	21
22. 第7・8号住居址実測図	22
23. 第10号住居址・土壇実測図	23
24. 土壇5出土土器実測図	24
25. 土壇5・6実測図	25

図 版 目 次

1. 本川原遺跡周辺の航空写真	31
2. 第6号住居址 (1) (発掘前)	32
3. 第6号住居址 (2) (発掘後)	32
4. 第6号住居址土器出土状況 (1)	33
5. 第6号住居址土器出土状況 (2)	33
6. 第6号住居址土器出土状況 (3) 東北壁	34
7. 第6号住居址土器出土状況 (4) 床中央部	34
8. 第6号住居址土器出土状況 (5) 東壁	35
9. 貯蔵穴	35
10. 甕形土器 (1) 第6号住居址出土	36
11. 壺形土器 (4) //	36
12. 壺形土器 (6) //	37
13. 壺形土器 (7) //	37
14. 壺形土器 (8) //	37
15. 壺形土器 (9) //	38
16. 壺形土器 (10) //	38
17. 鉢形土器 (11) //	38
18. 鉢形土器 (12) //	38
19. 鉢形土器 (13) //	38
20. 坏形土器 (14) //	39
21. 高坏形土器 (15) //	39
22. 器台形土器 (16) //	40
23. 器台形土器 (17) //	40
24. 鍋形土器 (18) //	40
25. B区より望む (国道34号 手前福岡)	41
26. 第7・8号住居址	42
27. 土塚2	42
28. 第10号住居址	43

I 本川原遺跡の調査経過

建設省佐賀国道工事事務所から国道34号線の改良工事施行に先立って、当該地域約 4,500m²を対象とする埋蔵文化財の発掘調査について依頼があったのは、昭和49年7月のことであった。その後具体的な協議を重ねて発掘調査にかかわる覚え書の交換をなし、同年10月中旬から本川原遺跡の第2次調査を実施することになったのである。

(1) 調査委員

委員長 瀬戸口芳夫 佐賀県教育委員会教育長
委員 米村 信幸 建設省佐賀国道工事事務所所長
" 鏡山 猛 県文化財専門委員
" 岡崎 敬 "
" 七田 忠志 "
" 小田富士雄 "

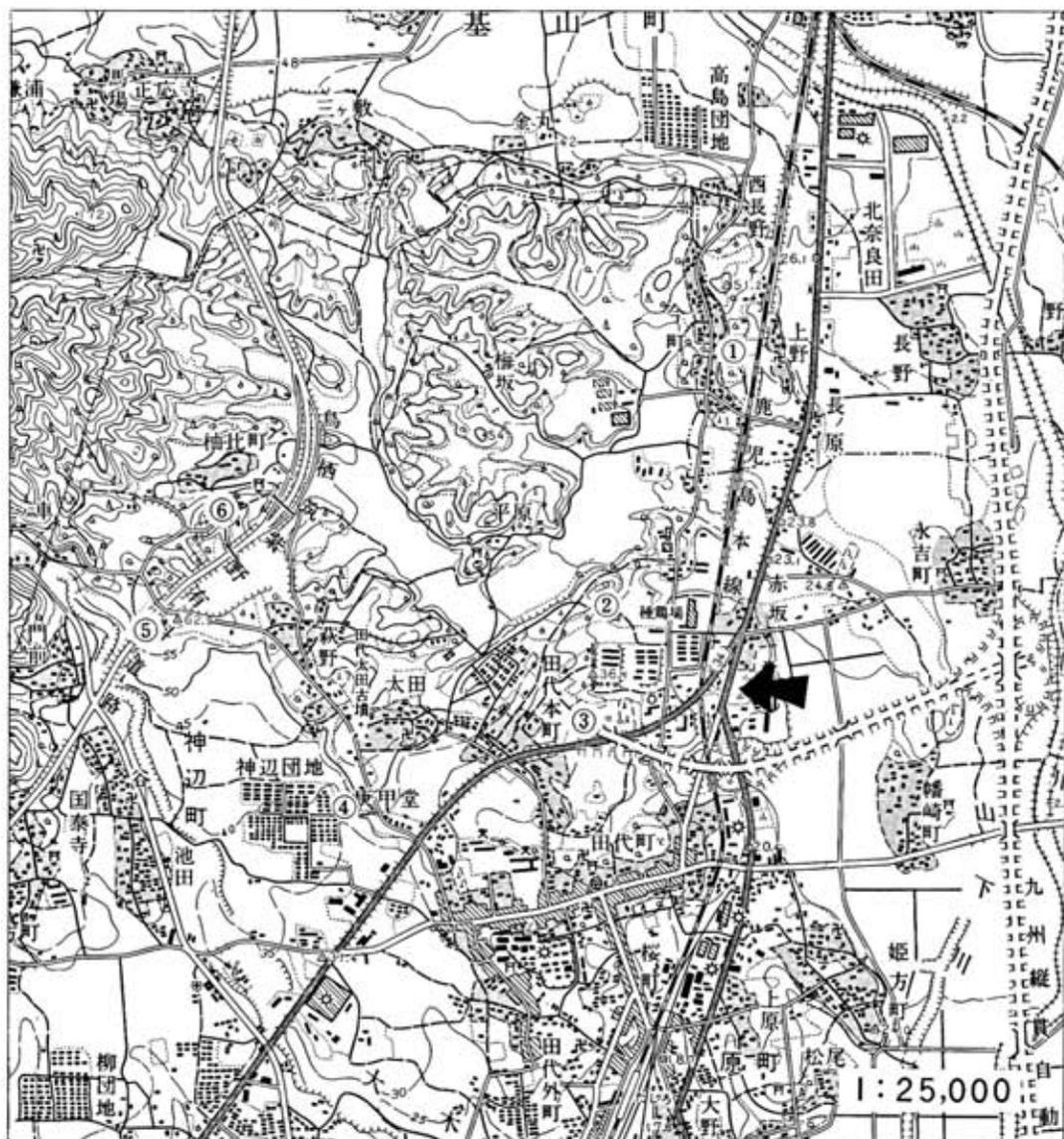
(2) 調査員

総括 木下 之治 県文化財調査監
指導 高島 忠平 県文化課文化財調査係長
調査主任 木下 巧 " 文化財調査係
調査員 石隈喜佐雄 "
" 天本 洋一 "
調査補助 藤戸 直美 佐賀大学学生
" 盛 峰雄 別府大学学生
協力 鳥栖市教育委員会・吉松医院・九州技術開発KK・多久土木KK

(3) 事務局

局長 田中寿義雄 県文化課課長
次長 平山 政己 県文化課課長補佐
" 浦 信孝 建設省佐賀国道工事事務所調査課長
庶務・渡辺 博 " 庶務課長
会計 百武 定弘 県文化課庶務係
中野 安正 "
三島由紀子 "

1. 本川原遺跡の周辺図



- ①上野古墳 ②剣塚 ③田代天満宮東方遺跡
 ④ 庚申堂塚前方後円墳 ⑤神辺遺跡 ⑥田代公園遺跡

II 本川原遺跡の環境

1. 地理的環境

本川原遺跡は、佐賀県鳥栖市永吉町字本川原に所在し、国道3号線から国道34号線が分岐する段丘上に位置している。この段丘は筑紫山系から南に走る支嶺が柚比町・今町の高位段丘を形成し、これから南東に延びる数条の中位段丘の一つの末端丘である。⁽¹⁾

この遺跡からは、西北に標高847mの九千部山を主峰とする筑紫山系を望み、北に特別史跡基肄城跡がある基山がそびえ、東には九州山系が連なり、それから派生する数本の河川は筑後川となり、南に広大な沖積平野を展開させている様を一眺できるのである。

(1) 小林肇「地形と地質」鳥栖市史

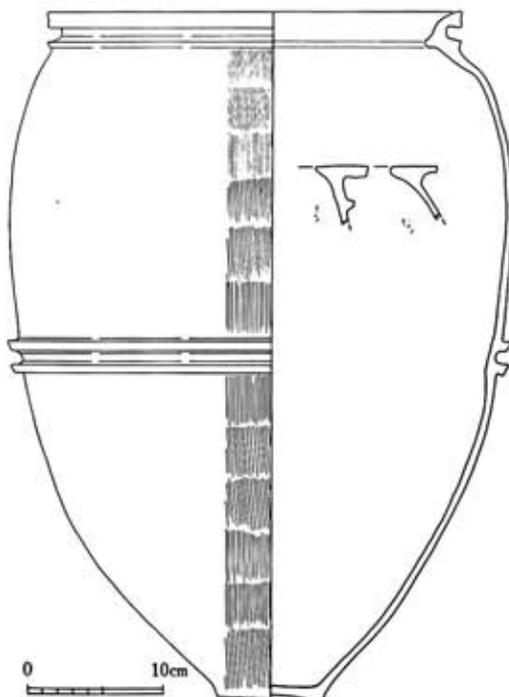
2. 歴史的環境

本川原遺跡周辺の段丘あるいは段丘末端には、先縄文・縄文時代の遺物散布地が点在しているが、遺跡の性格等は不明であって今後の調査を待たなければならない。⁽¹⁾

弥生時代の遺跡には墳墓と住居址がある。住居址には今泉町の藤ノ木竅穴住居址および柚比東方弥生遺跡などがあり、その周辺からは、石斧・石包丁・石鏃などが発見され

ている。墳墓の大半は甕棺墓であって、⁽²⁾この遺跡の西北方約500mの田代天満宮東方遺跡からは、95以上を数える甕棺が⁽³⁾発見されている。その西方には石蓋単甕棺を埋蔵する太田観音東方甕棺遺跡⁽⁴⁾があり、西北約700mには柚比東方弥生遺跡⁽⁵⁾があって銅戈1口・鉄剣2口が発見されている。また柚比の田代公園からも8組の甕棺が発見されたが未だ相当数の甕棺が埋置されていると推察される。⁽⁶⁾田代公園甕棺遺跡の西南方660mの基山バイパス沿いに神辺遺跡⁽⁷⁾があって弥生時代から中世に及ぶ箱式石棺墓7・土塚墓8・配石土塚墓2・祭祀場1および横穴式古墳1などが交錯して発見された。

〔神辺遺跡〕



2. 柚比田代公園出土甕棺実測図

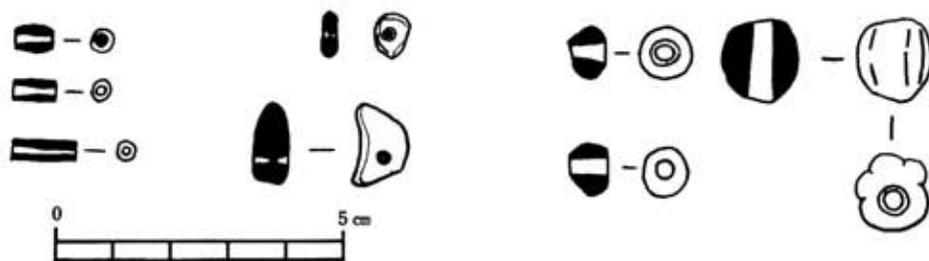
第7号石棺墓は側壁などの石材が全て抜きとられているが、長軸は190cmを測り短軸の両端で20cm、中央部で44cmを測る胴ぶくれの平面プランである。この石棺墓には管玉17（碧玉製・内、メノー製1）・小玉77（ガラス製）が副葬されており、弥生時代の所産と考えられる。この形態をとる石棺墓には第3・5・6号墓などがある。他の石棺墓は石材に加工が加えられており、前者と構造などに異質の点があり、築成年代に差があることが考えられる。

土塚墓には2類がある。第Ⅰ類土塚墓はA・B・Cなど7基あって、長軸130cm前後・短軸90cm程度を測る隅丸方形のプランであり、この断面はゆるやかな船底状を呈する。この形態をもつ土塚墓は弥生時代前期から中期にかけて営まれたものと考えられる。

第Ⅱ類土塚墓は長軸200cm・短軸150cmを測り、平面は楕円形を呈し、深さ100cmを測るU字状の断面で大形の土塚墓である。

配石土塚墓は、長軸120cm・短軸40cm程度の変形方形プランで約30cmの深さをもっている。土塚の上面に不整形の塊石を配する構造をもつものである。第Y号墳には変形勾玉1・扁平小玉1（滑石製）および小玉6（ガラス製）が、第Z号には青磁製の塊がそれぞれ副葬されていた。

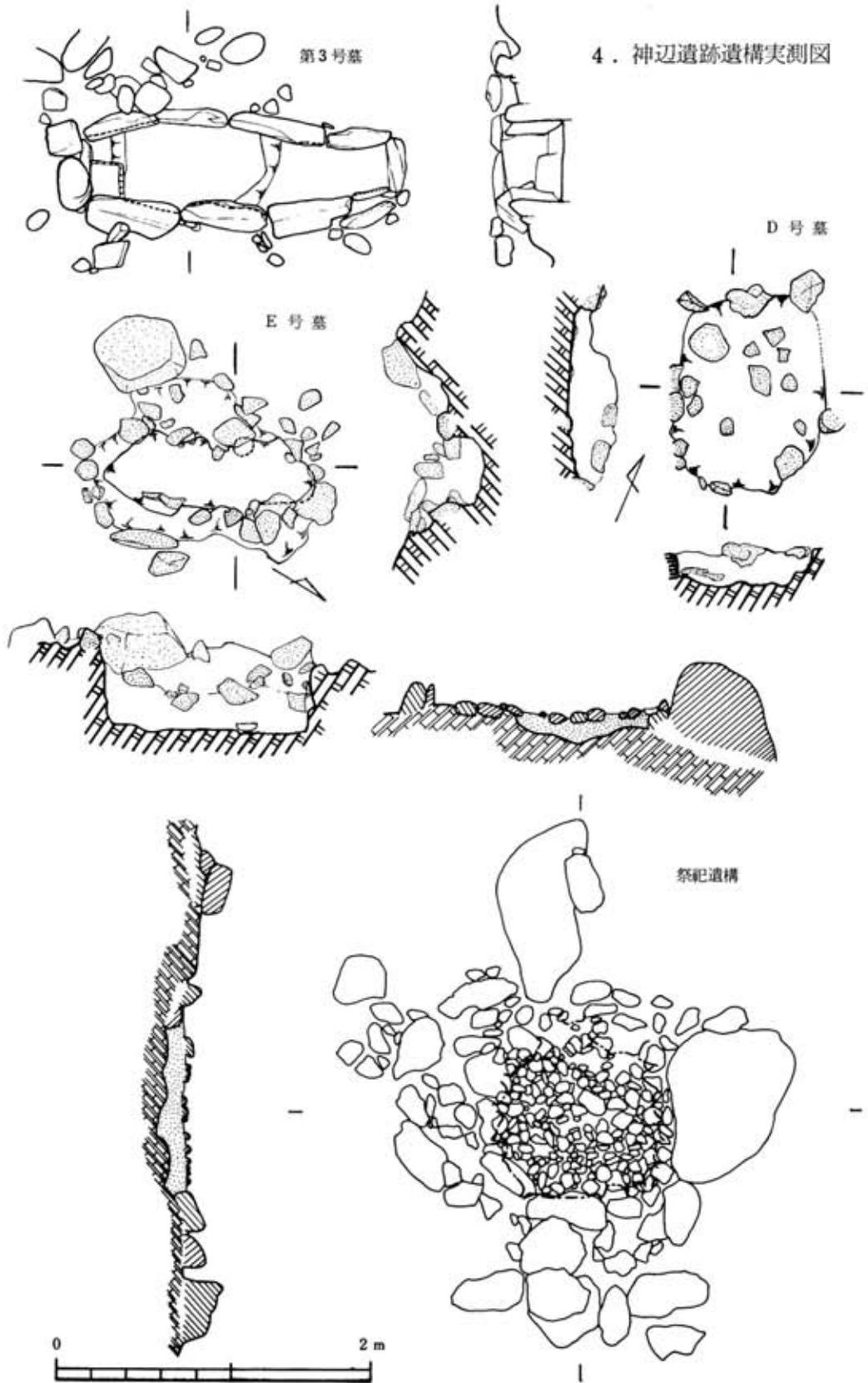
3. 神辺遺跡出土遺物実測図

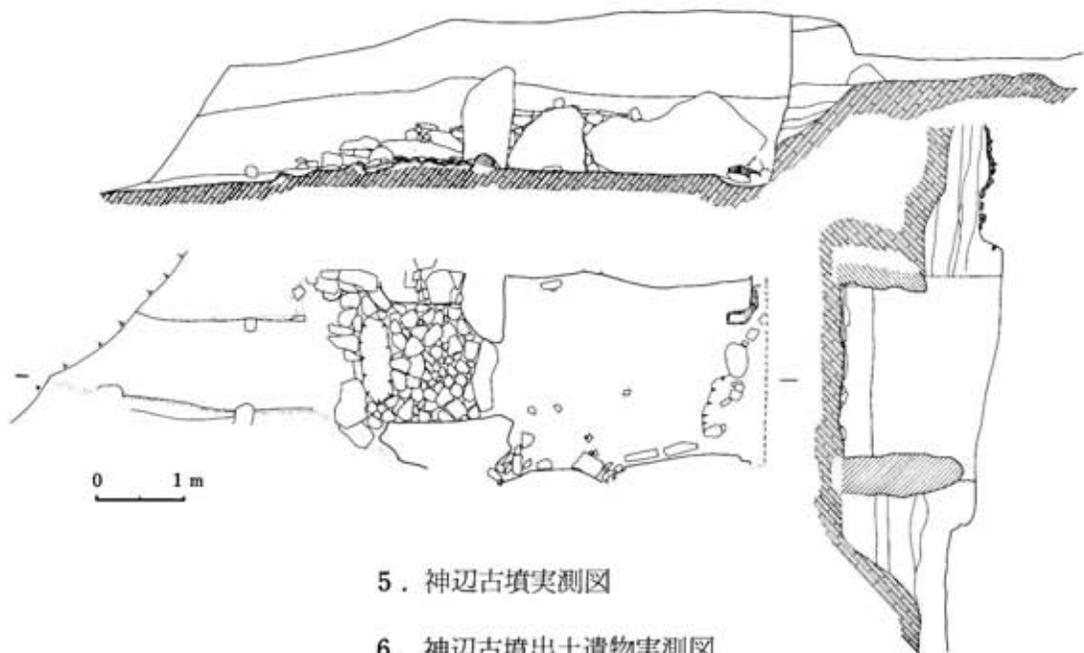


弥生時代における鳥栖地方は、小河川流域に農耕集落を基盤とする一つの広域にまたがる社会が成立していたことが推定され、河川の比較的上流にあたる袖比地方がその中心的存在となっていたのではないかということが遺物等の出土から考えられる。

この鳥栖地方の弥生時代の農耕社会は、古墳時代を迎えるといち早く古墳文化を摂取し、古墳文化を开花させたのである。本川原遺跡の方形周溝墓の築成に始まり、岡寺前方後円墳、庚申堂塚前方後円墳、剣塚などの前方後円墳、または装飾古墳として知られる史跡田代太田古墳をはじめ、上野古墳、薄尾古墳群、杓子か峰古墳群、神辺古墳群、そして東十郎古墳群などが分布しているのであって、筑紫火君の根拠地がこの古墳群地帯にあったことを物語っており、その中心は田代太田古墳から本川原遺跡を結ぶ地域ではなかったかと推定される。

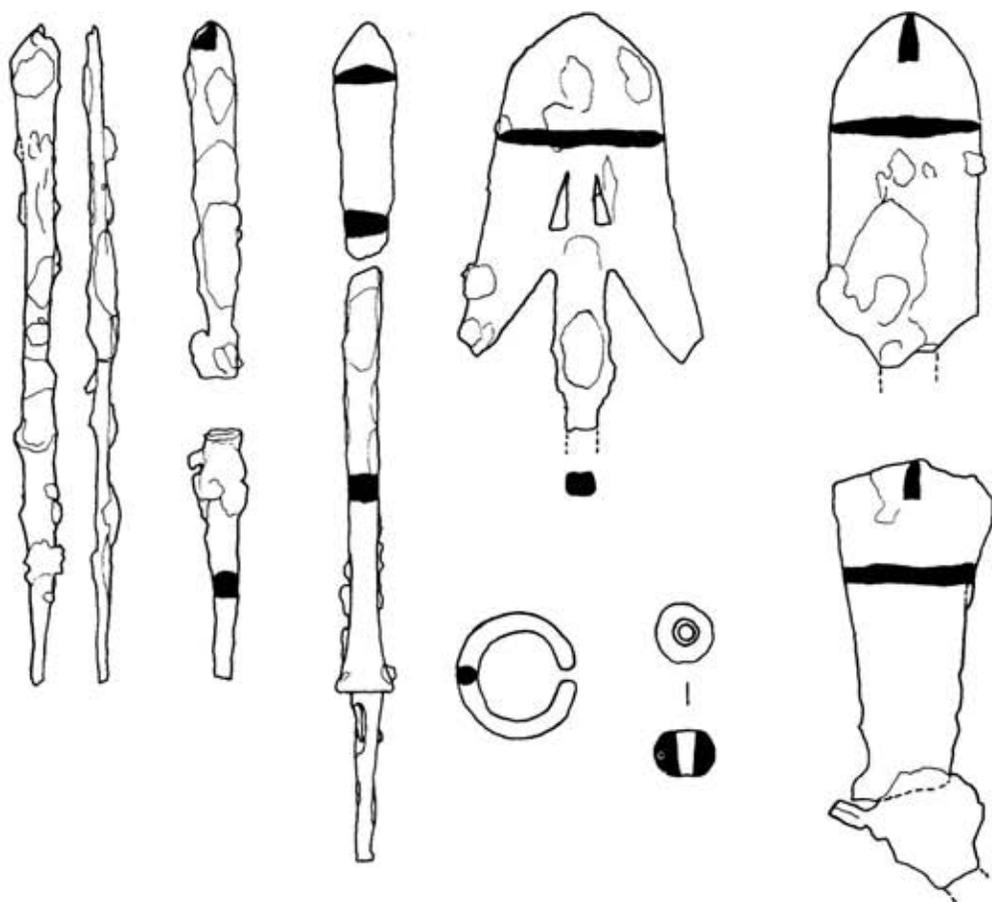
4. 神辺遺跡遺構実測図





5. 神辺古墳実測図

6. 神辺古墳出土遺物実測図



7. 庚申堂塚古墳墳丘実測図 (原図 松隈嵩)



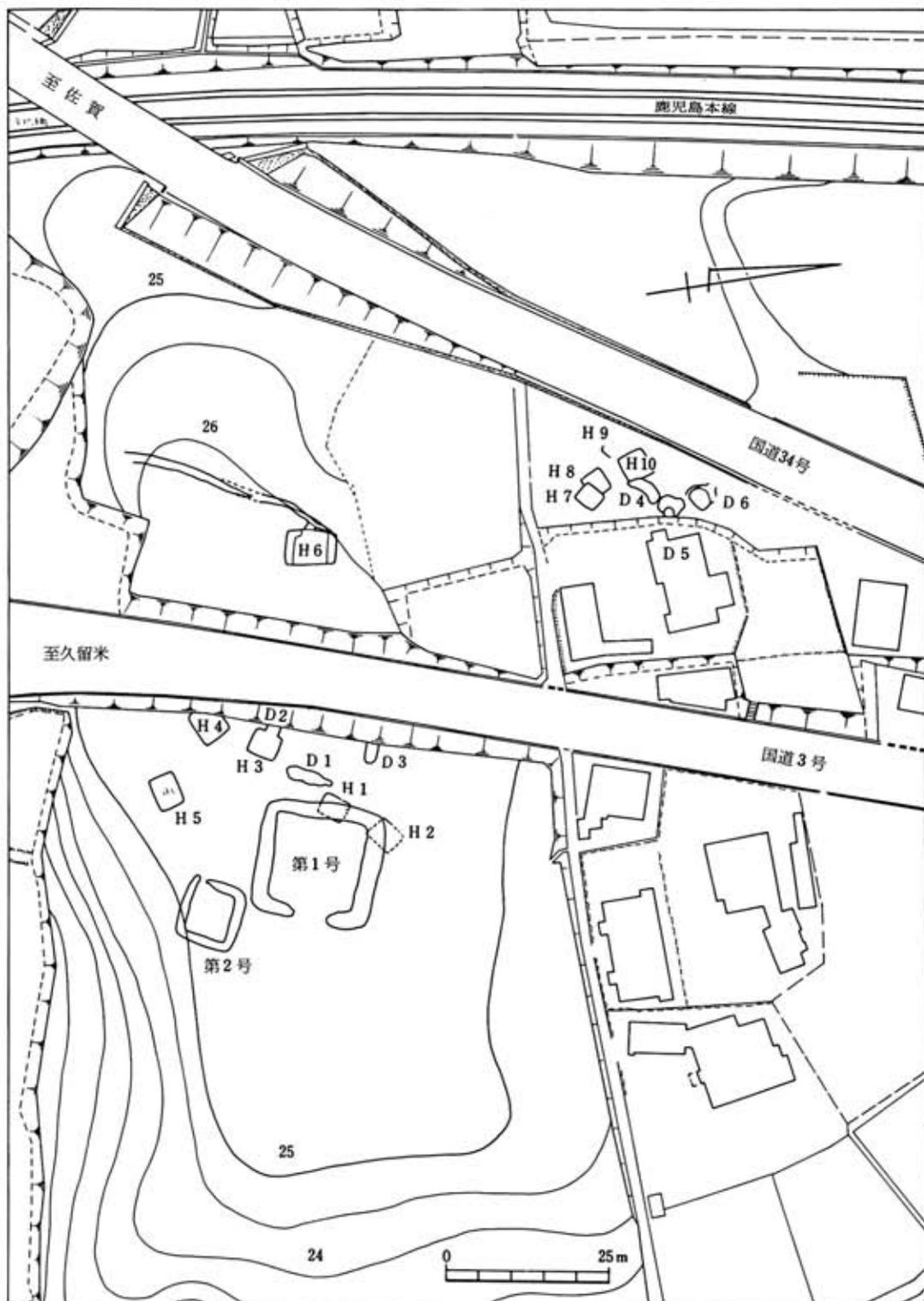
8. 剣塚前方後円墳墳丘実測図 (原図 松隈嵩)



要するに、この地域は弥生時代から古墳時代にかけての鳥栖地方の社会の推移を物語る遺跡が分布しているのであって、本川原遺跡はこの注目すべき重要な地域に所在しているということができよう。

- (1) 木下之治「原始時代」鳥栖市史
- (2) (1)に同じ
- (3) 木下巧「田代天満宮東方遺跡」佐賀県文化財調査報告書24
- (4) 「太田観音東方甕棺遺跡」佐賀県の遺跡
- (5) 松尾禎作「佐賀県考古大観」祐徳博物館
- (6) 「田代公園甕棺遺跡」昭和47年12月鳥栖市教育委員会が応急調査を実施した
- (7) 「神辺遺跡」昭和45年3月調査
- (8) 木下巧「本川原遺跡」佐賀県文化調査報告書26
- (9) 「岡寺前方後円墳」佐賀県の遺跡
- (10) 松尾禎作「剣塚」原始時代の鳥栖 鳥栖史談2
- (11) 「田代太田古墳」佐賀県の遺跡
- (12) 鏡山猛「基山町上野古墳」佐賀県文化財調査報告書3
- (13) 松尾禎作「薄尾古墳群について」鳥栖史談2
- (14) 「杓子が峰古墳群」佐賀県の遺跡
- (15) 木下之治「東十郎古墳群」佐賀県文化財調査報告書13

9. 本川原遺跡地形測量図



Ⅲ 本川原遺跡の遺構と遺物

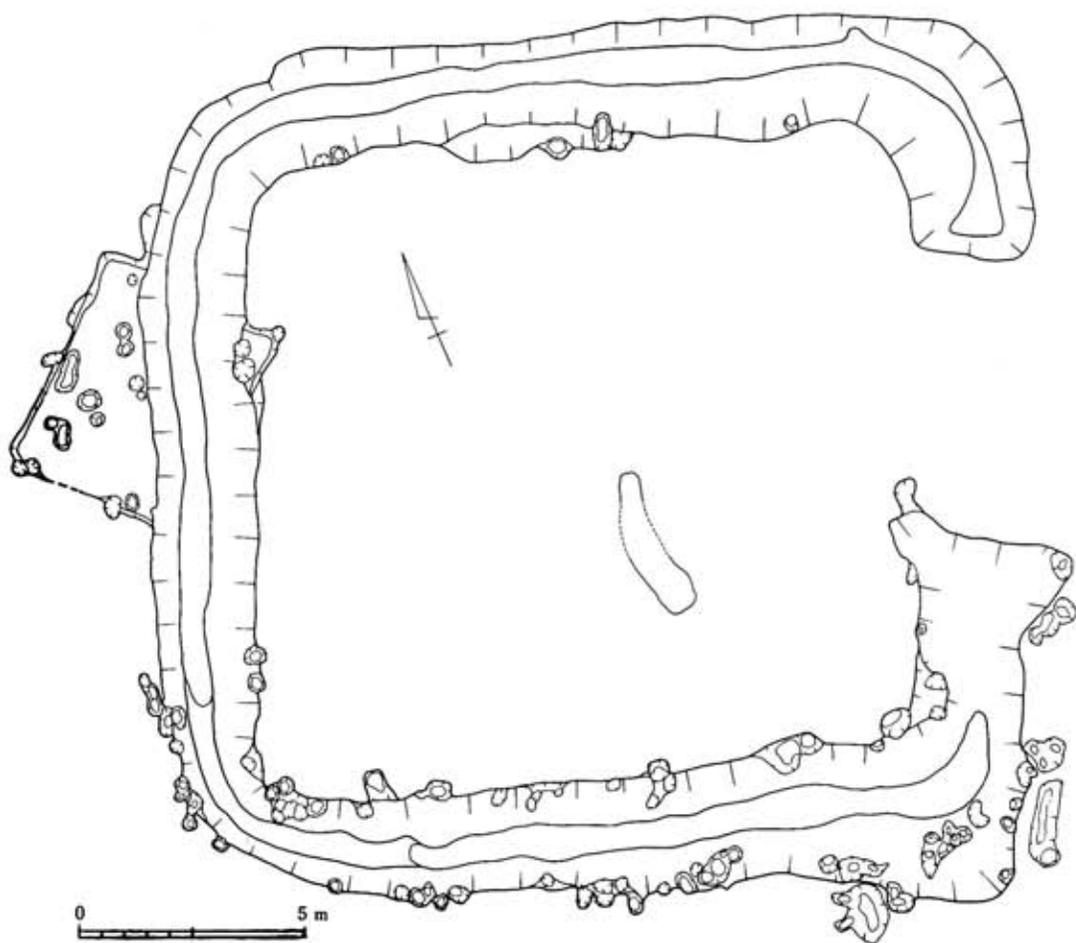
1. 遺構の概要

本川原遺跡は、標高26mの低段丘末端部に位置していて、ここからゆるやかな傾斜をもって宅地や圃場が営まれている平地地帯へ移向している。

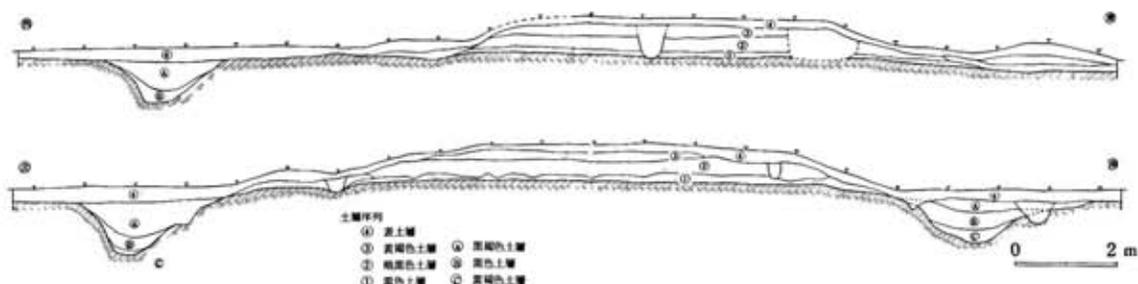
(1) 第1次調査の概要

遺跡が存在する低段丘を切って国道3号線が南北に貫通している。この国道の東側段丘の一部分が調査の対象区域であった。この調査区からは方形周溝墓2・住居址5・土壇3などが確認された。

第1号方形周溝墓は、この段丘末端の最高地点に陸橋を東に向けて築造されている。方形台状部は南北13.4m・東北14.7mで、周溝の上面幅は最大2.5m、最小1.5mであ

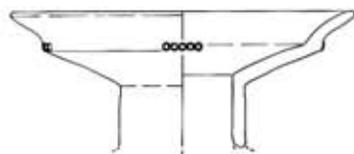


10. 第1号方形周溝墓実測図

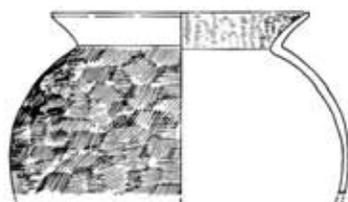
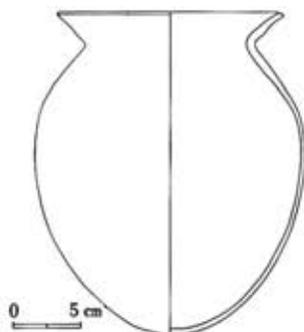


11. 第1号方形周溝墓断面図

る。内部主体は「へ」の字状に弯曲した土塚墓であって、全長 3.3m・北方の上面幅50cm・南方部上面幅80cmであって、横断面はU字形を呈し、深さが敷石上面まで20cm、床面までが30cmである。主体部の北半分あまりには塊石を敷きつめているが南方部にはそれがない。南溝から東溝にカーブする地点のほぼ底面中央部に、完形の甕形土器が倒置され、その西隣に二重口縁を有する口縁部と別個体の壺形土器が破壊された状態で出土した。甕形土器は高さ23.9cmであって、灰褐色を呈し刷毛による調整のあとが認められる。



12. 第1号方形周溝墓
出土土器実測図



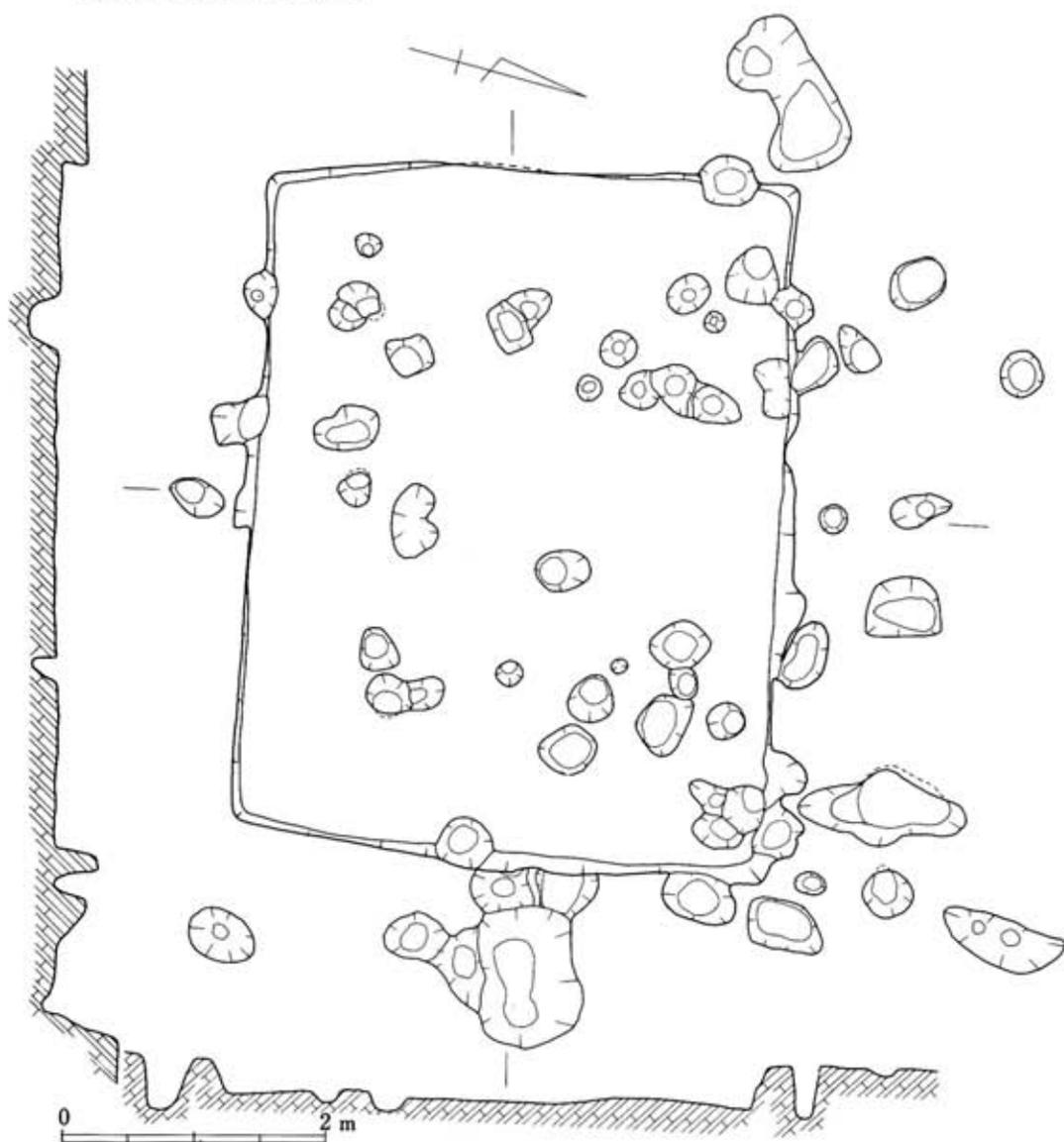
13. 第5号住居址出土
土器実測図

第2号方形周溝墓は第1号方形周溝墓の東南に接して設けられている。台状部は東西7.75mを測る。周溝は上面で約1m幅でありその断面はU字状である。また、周溝の南西部のカーブ南南面で溝が消滅して陸橋を形成している。これの封土・内部主体などは確認されなかった。

住居址は5戸発見された。第5号住居址は縦5.3m・横4.0mの長方形を呈し、北壁35cm・南壁25cmの高さをもつ住居址である。これより出土した壺形土器の口縁部は「く」字状を描き、胴部は球状に張り出している。口縁内外は刷毛による調整、肩部から胴部にかけては、櫛状用具で斜方向に調整を繰り返したもので斜格子文を呈している。内部は篋で縦に粗しく調整している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

この調査区外東部にも3戸の住居址が確認されており、これらの住居址は形態的にも類似し、また出土する土器も古式土師器の категорияとして把握できるであろう。ただ

14. 第5号住居址実測図



古式土師器の中にあつて、住居址から出土する土器が第1号方形周溝墓から出土する土器よりも古い時期の所産であると云えよう。

(2) 第2次調査の概要

この低段丘を南北に切り通している国道3号線の西北側で、3号線から分岐した国道34号線の南東部、つまり3号線と34号に挟まれた区域約4,500m²の低段丘が今次の調査範囲であった。

この区域は段丘頂部から南部にかけて竹藪、34号線に沿った地域が畑地であり、北東の斜面を削平して宅地がつくられている。その東に隣接して姫方部落の氏神が鎮座している。

この宅地跡より南部にかけての畑地は、3号線の道路工事に伴う土捨場であって、旧表土から1mないし3mの厚さで堆積しており、その土砂の排土に困難を極めた。

段丘頂部には第6号大形住居址があって、その構造に特異性が認められる。即ち、南・北の壁面に沿ってベッドを設け、更に西北隅から野外に向けて通路をつくり、その路は南側斜面を貫いているものである。この住居址の西隣に2穴からなる貯蔵穴がある。

この第6号大形住居址の北方約50mの地点に4戸の住居址がある。第7・8号住居址が重複した状態で存在し、その西隣に第9号住居址がほとんど削平され、東壁をわずかに残している。第8号住居址の北隣に第10号住居址があって、上面は削平されていたが平面プランはおさえることができた。

これらの住居址群の北側に隣接して不定形の土壇が3か所設けられているが、その性格を明らかにすることはできなかつた。また、調査域全面に無数の大小ピットが確認された。

2. 住居址

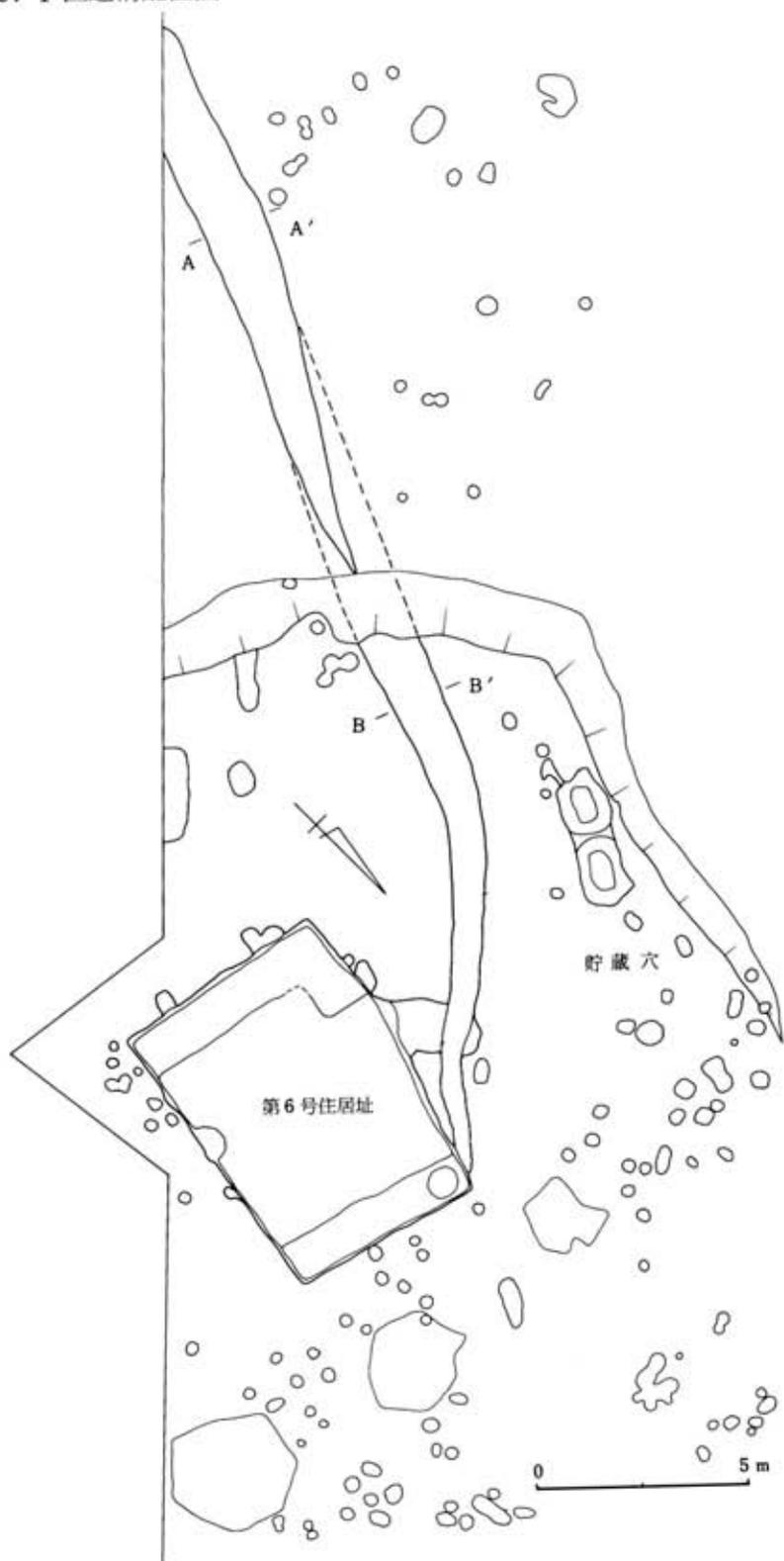
(1) 第6号住居址

段丘末端部に形成された一つの頂点部——第1号方形周溝墓が築かれた頂点から西へ約50mの地点にある頂上部（標高26.4m）に第6号住居址は存在する。

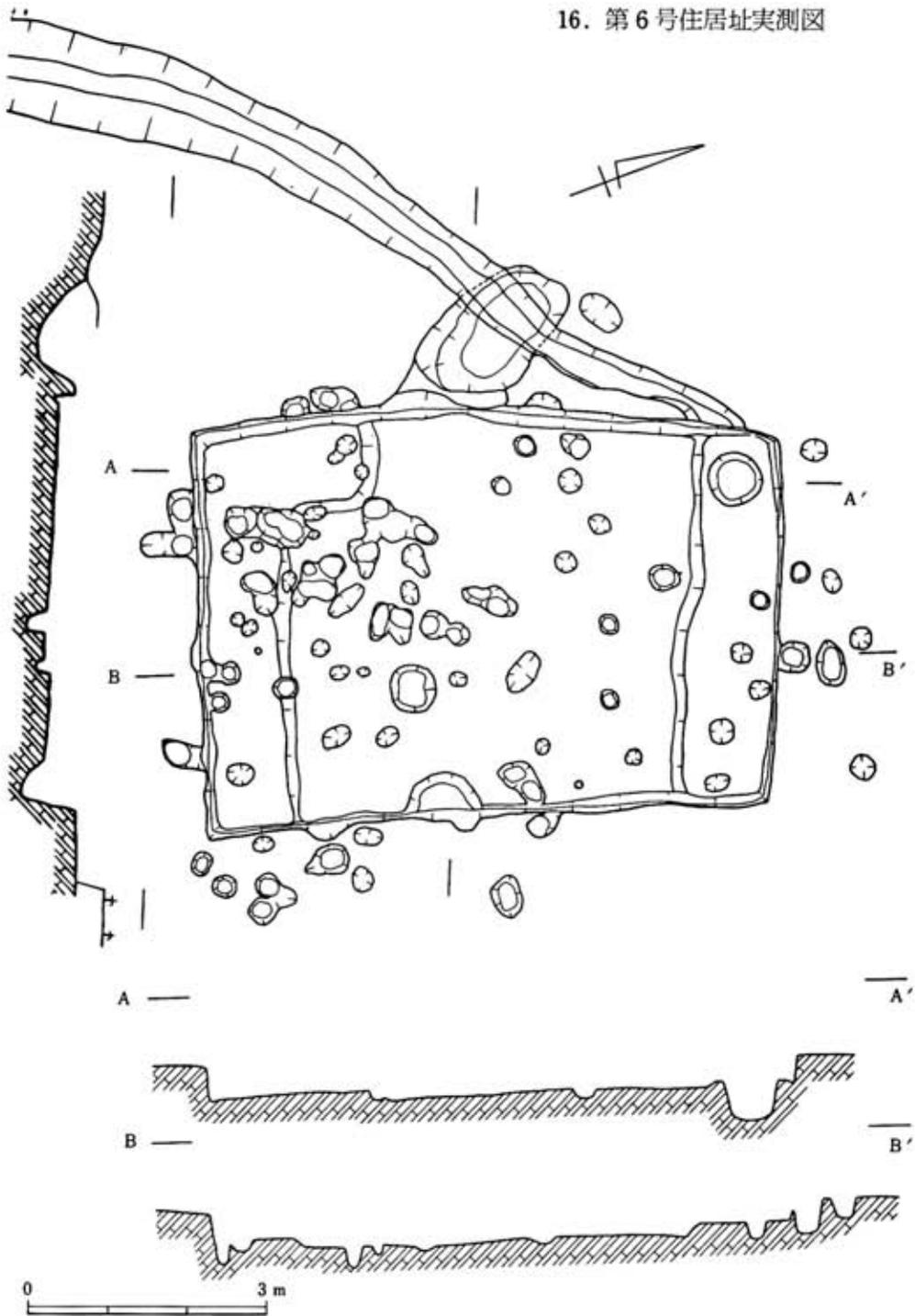
この住居址の東壁7.1m・西壁7.4m・南壁5.2m・北壁4.6mではほぼ長方形を呈し、長軸は北北東を向いている。壁面は4壁ともほとんど垂直で床面までの高さが40cmから50cmを測る。床面には北壁と南壁に沿ってベッドが設けられている。北面のベッドは上面幅85cmから105cm・長さ4.5mであり、床面より13cmないし17cm高い。このベッドの西部には上面径70cm・底面径45cm・深さ50cmのピットがあるが、これはこの住居址に第1次的に附属するものと考えられるところから貯蔵穴である可能性が強い。南面するベッドは、西壁に接するところまで設けられており逆L字状を呈している。ベッドの上面幅90cmであり、床面より10cm程度高い。

壁面と床面・壁面とベッドが交叉するところには、幅10cm内外・深さ3cm程度のU字

15. F区遺構配置図

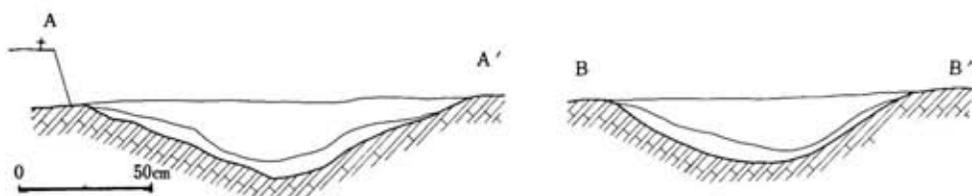


16. 第6号住居址実測図



溝が廻らされ、東壁中央部の床面に設けてある半円形ピット（上面径 100cm・深27cm）に至っている。このU字溝は、雨期ににじみ出る水の誘導溝であり、このピットは水寄場になっていたものと推察される。この他、炉址やカマド址などは確認できなかった。

17. 第6号住居址小路断面図



更に、この住居址を特色づけるものの一つとして小路が附設されていることである。この小路は西壁北端部のベッド上面から南西に向って走り、8 m ぐらいから向きを南南西に変え斜面を下っている。調査範囲内で延長29 m に達し、さらに南下されるものと推察される。この小路は、家との取り付け部で上面幅75 cm・深さ8 cmの船底状であり、11 m 地点では上面幅120 cm・深さ25 cm、23 m 地点では上面幅150 cm・深さ60 cmである。小路の床中央部約30 cm幅の部分は、たたきかためたように堅くなり粘土状を呈していて、その厚さは2～3 cmである。

本川原遺跡における10戸の住居址において土器を内蔵していたのは、4・5号であったが、出土した土器はごく僅かで、全般的にみて無遺物の状況であった。しかし、第6号住居址だけは豊富な土器群を残存していた。

第6号住居址の土器類は床・ベッドの全面から出土したが、床面の東北部に集中的に推積していた。この部分からは、甕・壺・台付壺・鉢・高坏形土器などが出土した。床面の南東隅で東壁に接して鍋形土器が出土した。この土器は後世の穴掘りのために破損の度を深めたものと考えられる。器台形土器は床面中央部のやや西寄りの位置から出土した。これらの土器はその総てが破損した状態で出土した。

甕形土器(1) 口径18.9 cm、高さ23.7 cmである。口縁部はやや外方に向って開き、底部は平底の形態をとるが丸味を帯びており不安定な座りである。砂粒を相当に含み焼成良巧で黄褐色を呈する。口縁部から胴部にかけて荒い刷毛目が斜に走り、胴部から底部には縦に刷毛目を施している。器内にも横に走る刷毛目がある。また、胴部より上に煤の附着がみられる。

甕形土器(2) 口縁径24 cm。口縁部は外方に向って開き、口縁から腹部にかけて縦の刷毛目が大胆に施され、胴部以下は斜位の刷毛目がある。砂粒を含み焼成良く赤黄褐色を呈する。胴部より下位に煤の附着がみられる。器内には口縁部に斜位、胴部に縦・斜位の刷毛目がある。

甕形土器(3) 口縁部25 cm。底部を欠いているが、口縁部は肩部から外側へく字状に鋭く弯曲している。胴部の張りはみられない。胎土に砂粒を含む固い焼成であって暗褐色を呈する。器外は縦の刷毛目があるがそれを摺り消している。器内も口縁部は横・肩

部より下は斜位の刷毛目があって、処々に摺り消しの手法が見られる。

壺形土器(4) 口縁径14.5cm・高さ18.3cmを測る。口縁部は肩部からほとんど垂直に立ち上り、肩部から胴部にかけてゆるやかなカーブをみせ丸底をもつ土器である。器外の口縁部は叩き跡を残し、一部は摺り消され刷毛目跡も見られる。肩部から胴部には斜に走る叩き目がみられ、胴部より下部は篋による調整痕がある。胎土には砂粒を含み焼成も良く褐色を呈する。

壺形土器(5) 口縁径15.8cm。精選された粘土に微量の砂粒を含み焼成も良くあざやかな赤黄褐色を呈する。口縁部はゆるやかに弯曲しながら外方へ開く。胴部は球状に張りがみられ、丸底と考えられる。口縁部には縦に走る刷毛目を篋で摺り消し、肩部から胴部にかけて斜に叩き痕があり、これも摺り消しの手法がみられる。器内側は刷毛目を更に篋で調整している。

壺形土器(6) 肩部が調整された土器である。口縁部は直線的にやや内側へ閉じながら立っている。ゆるやかなカーブを描く口辺部は、肩部で鋭い反転をみせて丸底の底部へと続いている。胎土に砂粒を含み焼成も良く褐色を呈する。胴部に縦の刷毛目痕があり、器内は篋による調整が全面にみられる。口縁径 9.8cm・高さ 9.2cm。

壺形土器(7) 口縁径14.4cm。く字状に外方へ開く口辺部から、やや張りをみせる肩部となって、すんなり底部へと移行する。砂粒を含む胎土で焼成も良く黄褐色を呈する。

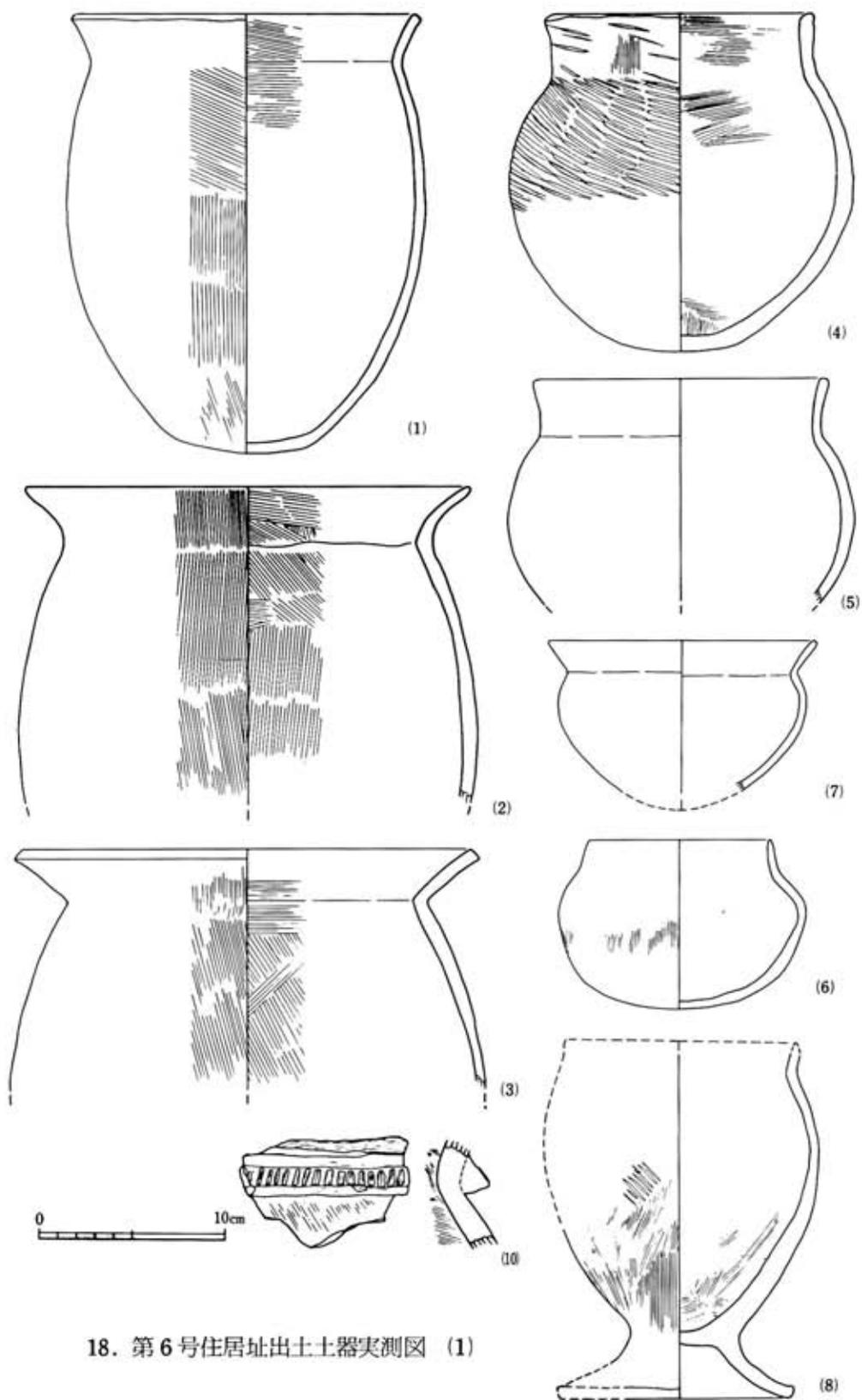
壺形土器(8) 口縁径12.6cm・高さ19cm。高台のついた壺形土器であって、やや外方へ開く短い口縁、ゆるやかな張り長い胴部、そしてラッパ状に開く台部を構成している。胴部には叩き目を、胴部下から台部には縦の刷毛目痕がある。器内は渦巻状の刷毛目が施されている。胎土に砂粒を含み焼成良好で褐色を呈する。

壺形土器(9) 壺形土器の頸部と考えられるが器形の全容は不明である。く字状に外方へ開く口辺部の所謂頸部に装飾が施されている。幅 1.5cmの粘土帯をめぐらせ、この粘土帯に斜格子状に篋で押庄して文様をつくり出している特色ある装飾である。器体の口辺部には縦の、肩部には斜の刷毛目痕がある。胎土に砂粒を含み焼成も良く黄褐色を呈する。

壺形土器(10) 壺形土器の頸部と考えられる。く字状に外方へ開く口辺部をもっており、その頸部に三角帯をめぐらせ、それに長さ約1cmの刻目を付して装飾している。器体の内外に刷毛目痕をもっている。胎土は精選され、砂粒を含み焼成も良好で赤褐色を呈する大形の土器である。

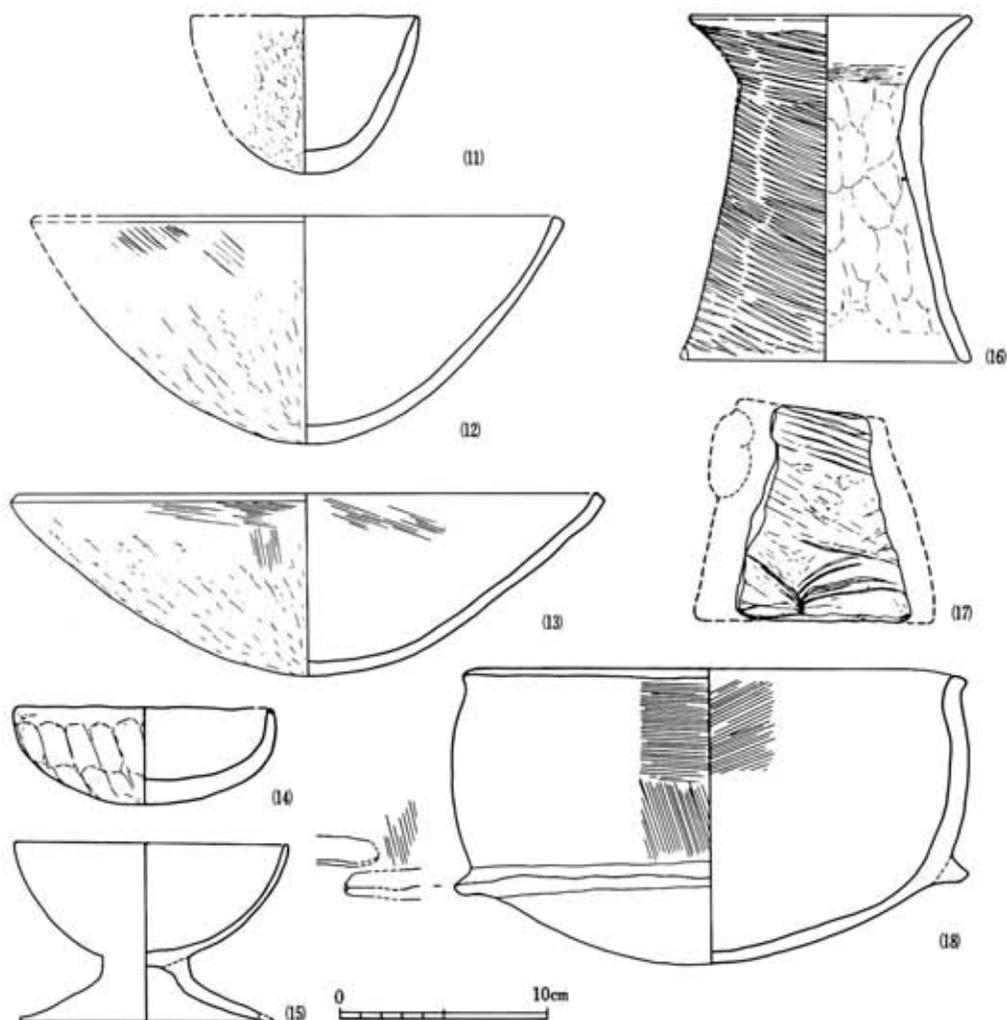
鉢形土器(11) 口径11cm・高さ 7.5cmの手控になる土器であって、褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

鉢形土器(12) 口縁径25.6cm・高さ11cm。深鉢形土器であって底部は丸底であるが尖



18. 第6号住居址出土土器实测图 (1)

19. 第6号住居址出土土器実測図 (2)



っている。口辺縁には処々に刷毛目と叩き痕があり、胴部から底部には篋による調整痕がみられる。胎土にはやや多量の砂粒を含み焼成良好であって、褐色を呈する。

鉢形土器(13) 口縁径28.5cm・高さ 8.8cm。浅鉢形土器であって、丸底である。口辺部に刷毛目痕があり、胴部から底部にかけて篋による調整がなされている。胎土にはやや多量の砂粒を含み焼成も良く褐色を呈する。

坏形土器(14) 口縁径12.3cm・高さ 4.7cm。肉厚の器体で手捏に成るものと考えられ、指圧痕と指によるなで痕をとどめている。胎土に砂粒をやや多量に含み焼成良好であって褐色を呈する。

高坏形土器(15) 口縁径13.2cm・高さ 8.6cm。半球状の坏形土器に広がり強いラッパ状の台を付している。胎土に砂粒を含み焼成良く赤黄褐色を呈する。

器台形土器(16) 上縁径13.4cm・高さ16.7cm。器体の外面全体に斜位の叩き痕をあざやかに付しており、内面の頸部に刷毛目を、それにより下部は指圧痕が全面に残っている。胎土にやや多量の砂粒を含み焼成も良く褐色を呈する。

器台形土器(17) 高さ 9.7cm。コップ状を呈する土製品であって器台形土器と推定される。器体の外面は篋状用具で施文し、それを指で摺消した部分が見られる。内面は全体に指圧痕が付されている。胎土に砂粒を含み焼成良く赤褐色を呈する。

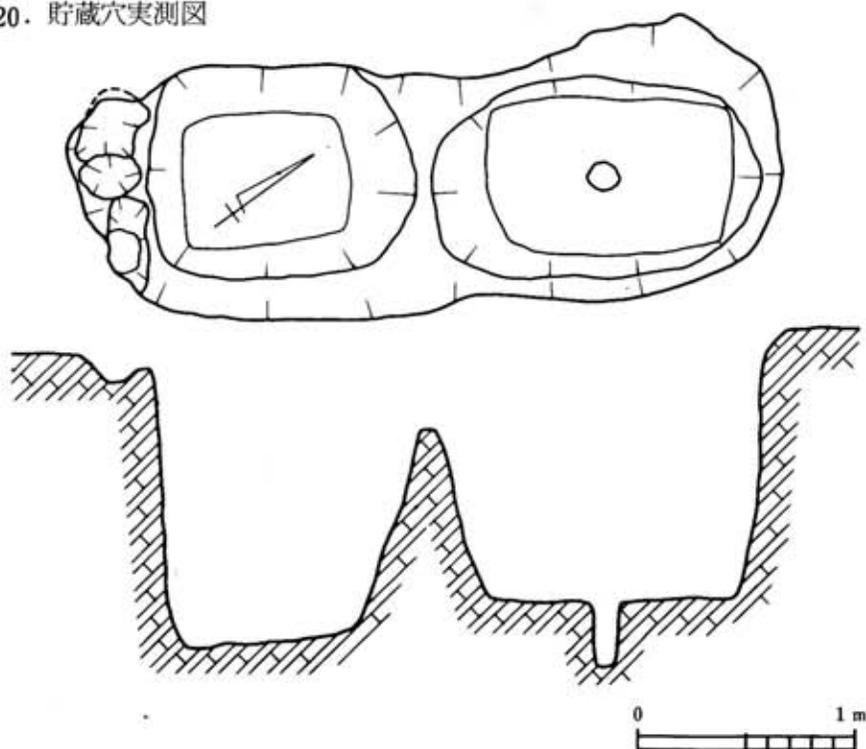
鍋形土器(18) 口縁径24.1cm・高さ14.2cm。口縁部がやや外方に開いた短かい口縁部であって、肩部に若干のふくらみをもたせながら丸底の底部を形づくっている。胴部から底部に分岐する位置に台形状の帯をめぐらせて縁をつくっている。この帯と帯との結合部は密着させないで上下にづらして間隔をもたせる特徴をもっている。精選された胎土に砂粒が少量含まれており、焼成も良好であって淡赤褐色を呈する。

(2) 貯蔵穴

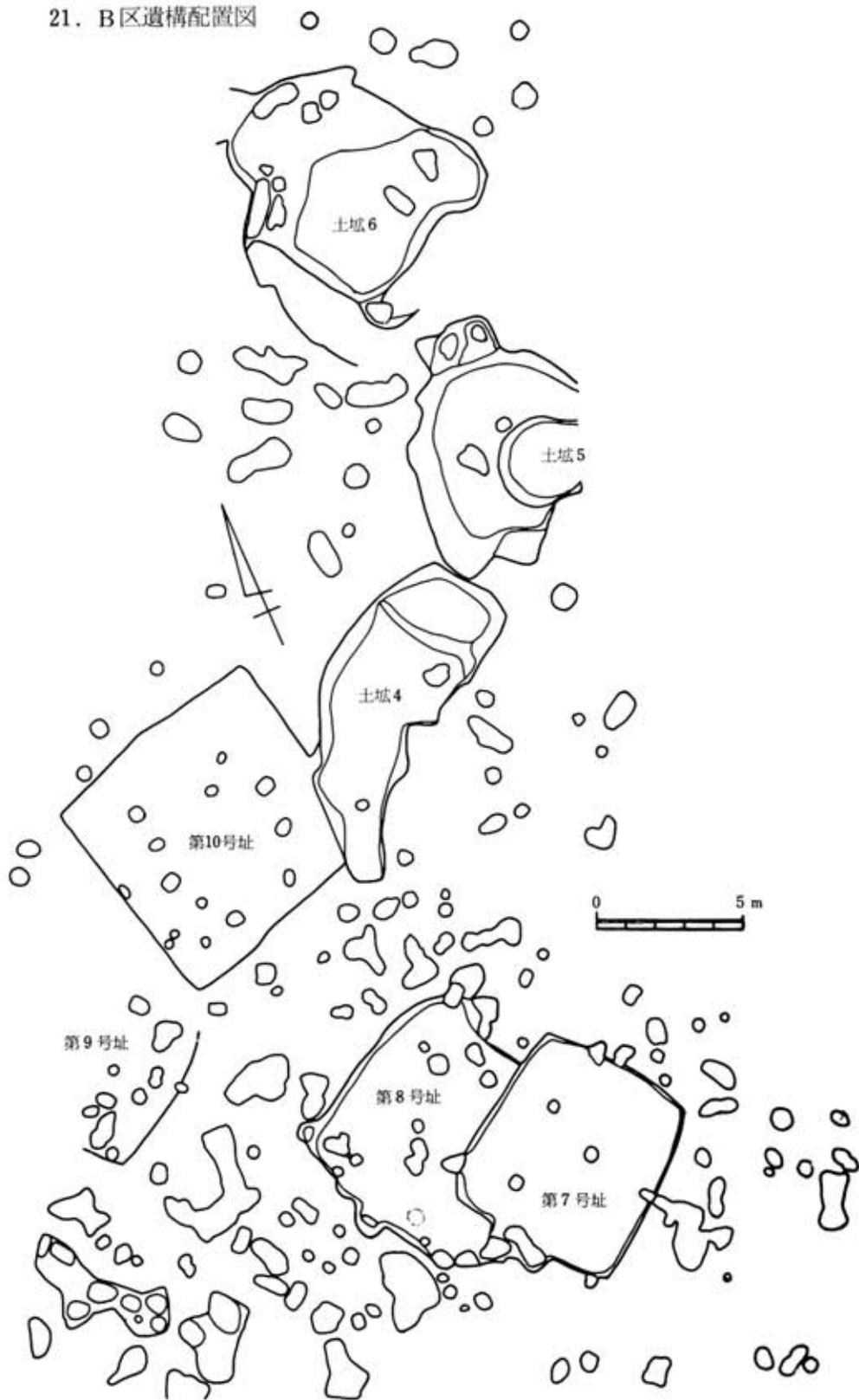
第6号住居址の西方6m、小路の西2mの位置に長軸を北東においた貯蔵穴が2箇連なって存在する。両者ともほぼ似た形態であるが、北方の貯蔵穴は長軸上面1.5m・底面1.1mの楕円形であって深さ1.2mを測る。南方の貯蔵穴は長軸上面1.2m・底面0.8mの隅丸方形であって深さ1.3m程度を測る。

これらの穴から遺物は何ら検出されなかった。

20. 貯蔵穴実測図



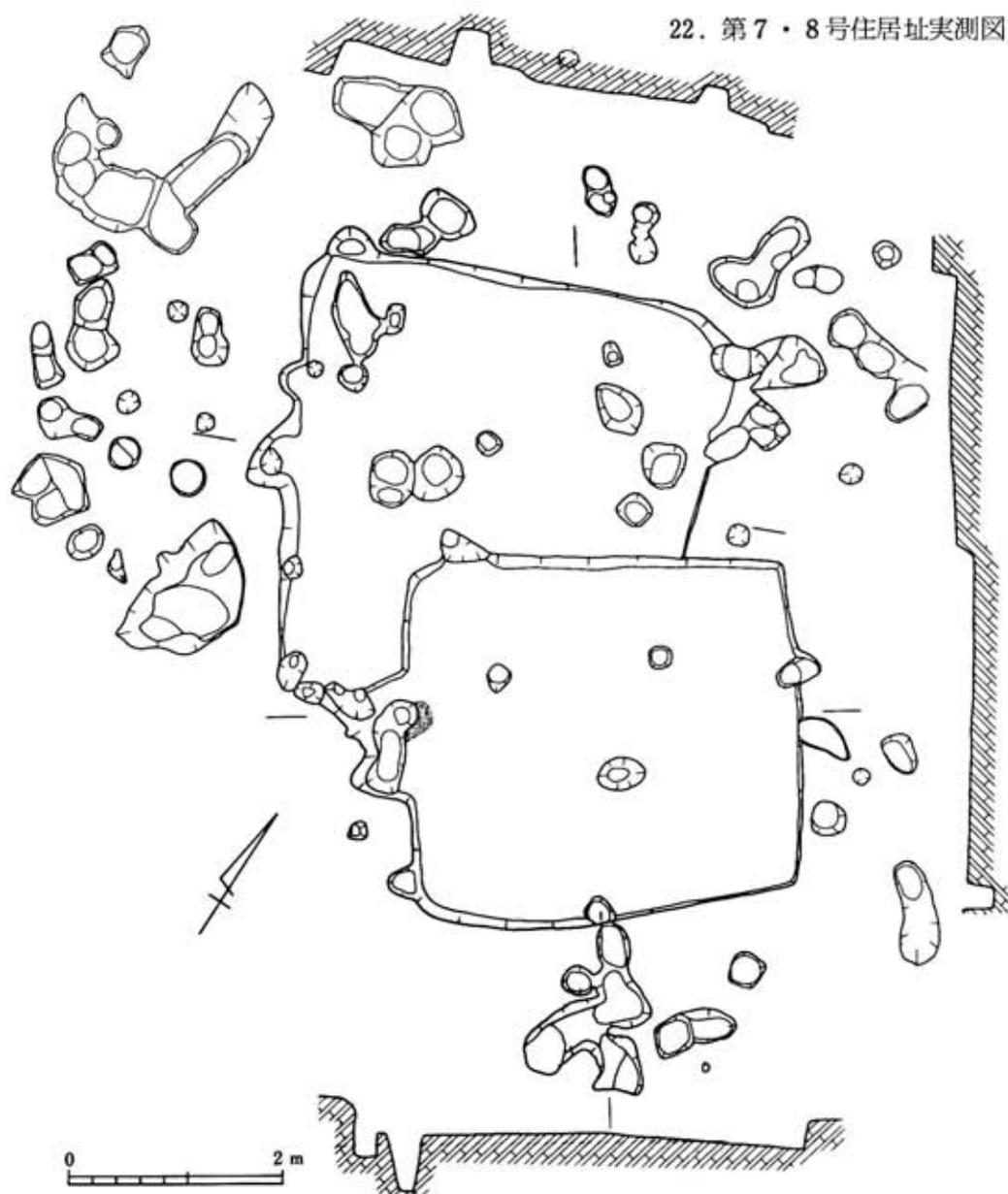
21. B区遺構配置図



(3) 第7号住居址

第6号住居址の北方50mの地点に住居址群が存在する中で南部に位置し、第7・8号は一部分が重複している。

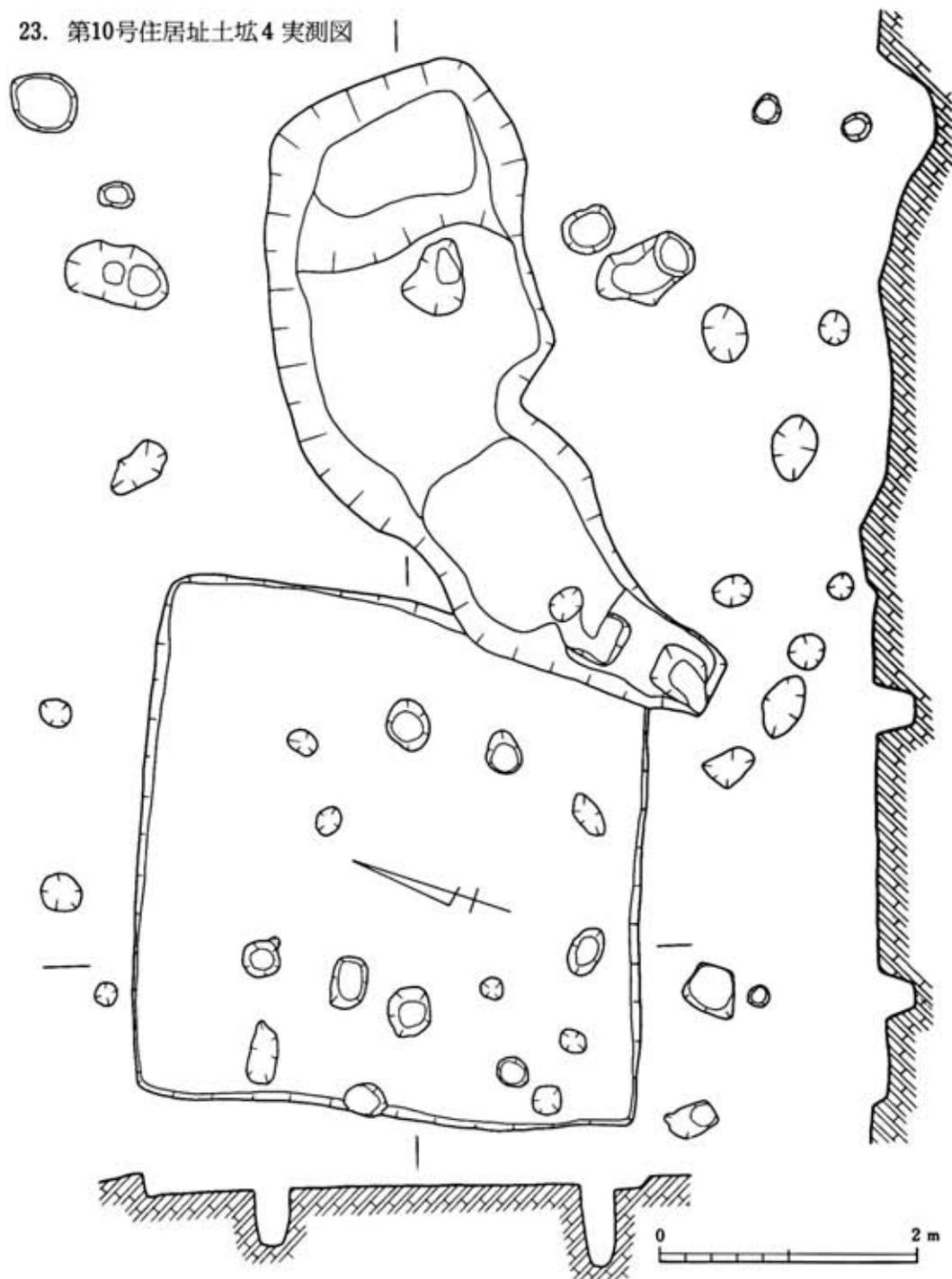
第7号住居址は第8号住居址を切っているところから、第8号住居址より後に営まれた住居址であって、長辺 3.2m・短辺 2.8mの長方形の平面プランを呈し、深さは15cm程度である。西壁面中央部は、後世に攪乱されておりこの住居が営まれた当時の形態は不明であるが、この壁面に接すると考えられる床面に焼土が一部残されている状況からするとかまどが造られていた可能性が強い。この住居址からの遺物は検出されなかった。



(4) 第8号住居址

第7号住居址の北に位置し、第7号住居址によって一部を切られた第8号住居址がある。長辺 3.7m・短辺 3.5m程度の方形プランを呈し、深さ10cm内外である。この住居址内に炉・かまどなどの施設は認められず、また遺物を検出することはできなかった。

23. 第10号住居址土壇4 実測図



(5) 第9号住居址

第8号住居址の西5mにある住居址であるが後世の削平がひどく東壁を薄く残すのみであって、6mを測る。これにも遺物等は検出されなかった。

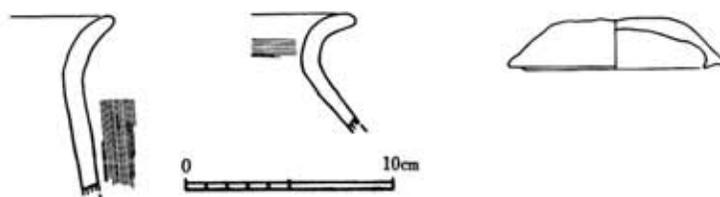
(6) 第10号住居址

第8号住居址の北5mに第10号住居址はある。長辺4.3m・短辺4mの長方形を呈し、深さ20cmを測る。この住居址からは炉・かまどなどの施設や遺物等検出されなかった。

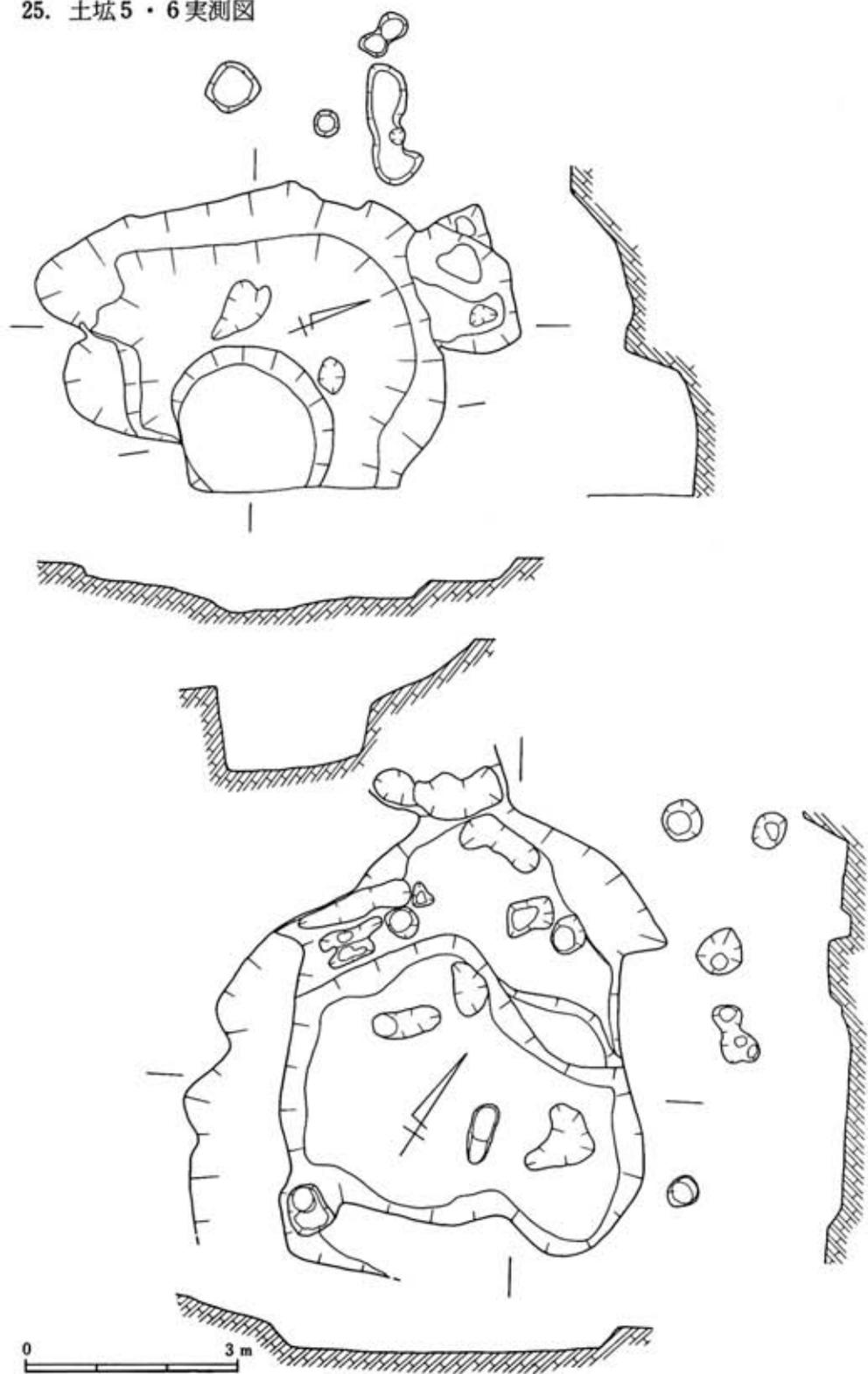
3. 土 塚

第10号住居址の北部一帯に不整形の土塚が数箇所存在する。土塚4の場合は長さ6m幅3mの不整形土塚であり、土塚6は径3.5m程度の五角形に近い不整形土塚である。これらの一群の土塚は何に使用し、又何の目的のために営まれたものか、その性格を明らかにすることはできなかった。ただ、土塚5の底面から須恵器坏および土師質坏が検出された。

24. 土塚5出土土器実測図



25. 土坛5・6実測図



Ⅳ 結 語

本川原遺跡が位置する低段丘末端部の調査は、国道34号線より南東部が対象であった。この調査の結果、国道3号線の東隣段丘上には方形周溝墓と住居址群および土坑、国道3号線と34号線に挟まれた段丘上には住居址群・土坑が確認されたのである。

国道3号線の東部、方形周溝墓から西南域に5戸の住居址が確認されたが、現在の国道3号線の道路面にも数戸の住居址が存在していた可能性が強く、この住居址群の西頂部に第6号住居址が位置している。この6戸の住居址にプラスα戸されたものがこの住居址群の実数であって約10戸前後と考えられる。

この住居址群の北方50mの位置に3戸の住居址があつて、これは更に国道34号線を距てた北へ数戸存在するものと推察される。

また、第2号住居址の東方約50mの地点にも1戸、第5号住居址の東方約50mの地点にも1戸の住居址がそれぞれ確認されているので、段丘最末端部にも住居址群の存在が推測される。

調査を完了した10戸の住居址のうち、第6号住居址を除いては、それらの構造や出土遺物から同一時期の集落と考えられる。第7号と第8号住居址が重複はしているが、その形態などから大きな時間差はなく、第8号住居が第7号住居に何らかの都合で建て替えられたものであろうと考えられる。

これらの住居址は約2,500m（50m×50m）の場の中に約10戸を単位とする集団で構成されていたものと考えられる。また、これらの小集団は約50m離れた場所に同じような小集落を形成しており、本川原遺跡の場合は3集団30戸によって構成されていたものと考えられる。

第6号住居址は、第1号住居址の属する集団であり、この集団内では最っとも高い場所に位置している。また第6号住居址の構造は他の住居址とは異なり、大形であつてベッドを広くつくり、屋外に付された小路は延々と南斜面を走っており、西側には2つの貯蔵庫をもつと云うものであつて、他の住居址とは区別されなければならないであろう。

第6号住居址から出土する土器は豊富である。他の住居址から出土した数少ない土器と比較するとき、鍋形土器などの新資料はあつても同時期の所産であろうと考えられる。ここで住居址とくに第6号住居址から出土した土器群を「本川原Ⅰ式土器」と呼称する。

さて、第6号住居址に生活をなした人々はこの小集団の場でどのような地位におかれたのであろうか。また、本川原3集団の中にあつてはどうかであつたろうか。古墳時代前期初期における氏族集団と氏上の社会構造の一端を知るに足るものではなからうか。

本川原の氏族たちの生活は、住居址の調査結果に基づくと長く続くことはなく廃絶し

ている。その要因がいかなる自然的・社会的要因であるかは不明であるがこの生活の場は墓域と化している。古墳時代前期のことである。即ち、2基の方形周溝墓がこれである。この墳墓より出土する土器を「本川原Ⅱ式土器」と呼称する。

方形周溝墓を形成した人々や、その生活の場も不明であるが、汎日本的な墳墓形態をもつ墳墓が築造されていることは、この地域の部族国家における支配者階級の存在が余知されるのである。

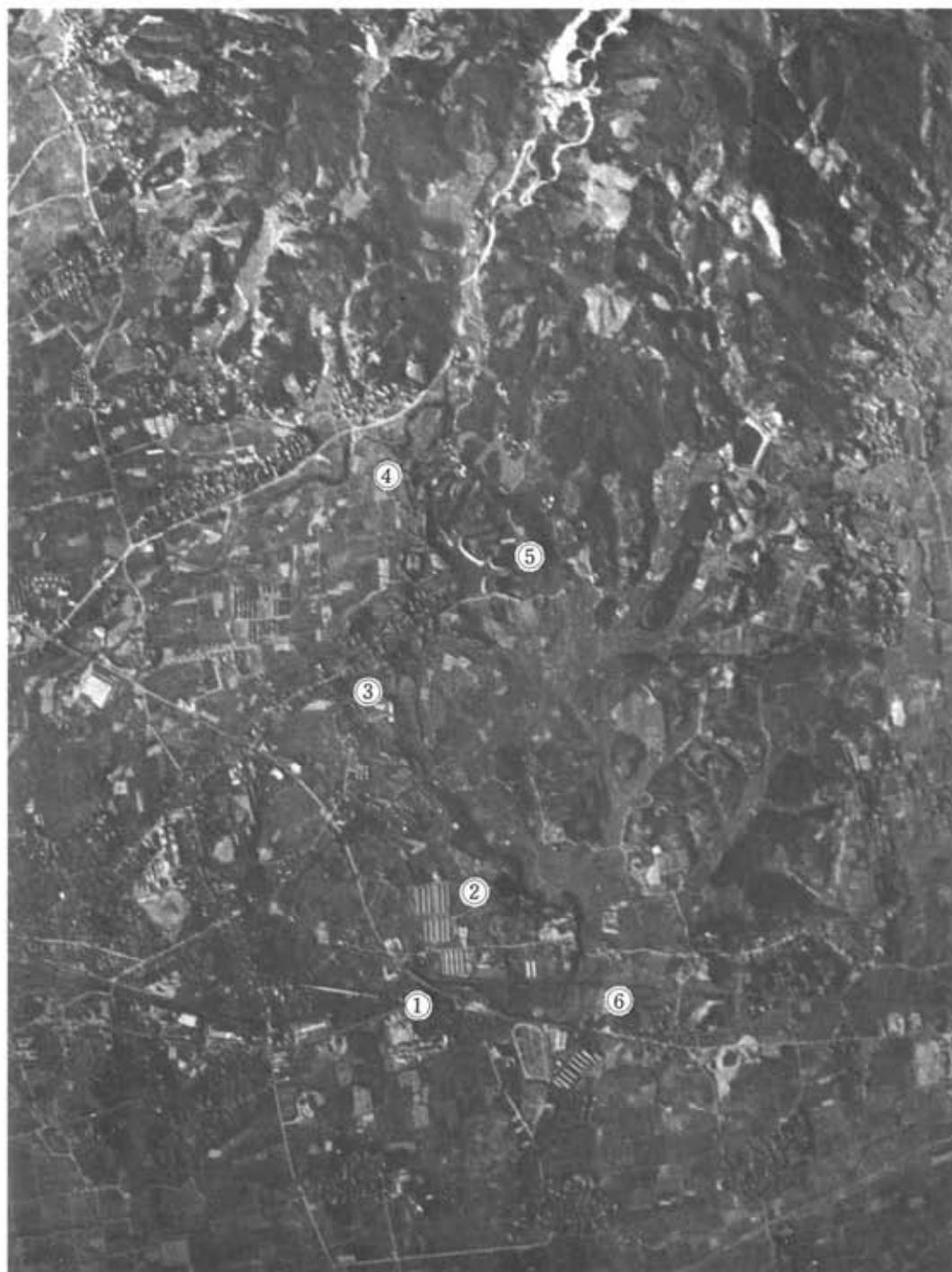
この方形周溝墓が築成された後は、畿内の——大和朝廷的な剣塚などの前方後円墳が形成されるようになり、本川原の段丘など併せて鳥栖地方は新しい古墳文化を开花させるのである。

本川原遺跡周辺においては、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては歴史的に空白の時代である。この空白の時代を埋める一つの遺跡として本川原遺跡が、住居址群落と方形周溝墓を伴って出現したことは、大和勢力が伸張してくる以前におけるこの地方の注目すべき所産として、且つ研究史上価値あるものとして把握できるであろう。



版

1. 本川原遺跡周辺の航空写真



①本川原遺跡 ②剣塚 ③太田古墳 ④神辺遺跡 ⑤田代公園遺跡 ⑥上野古墳

2. 第6号住居址 (1) (発掘前)



3. 第6号住居址 (2) (発掘後)



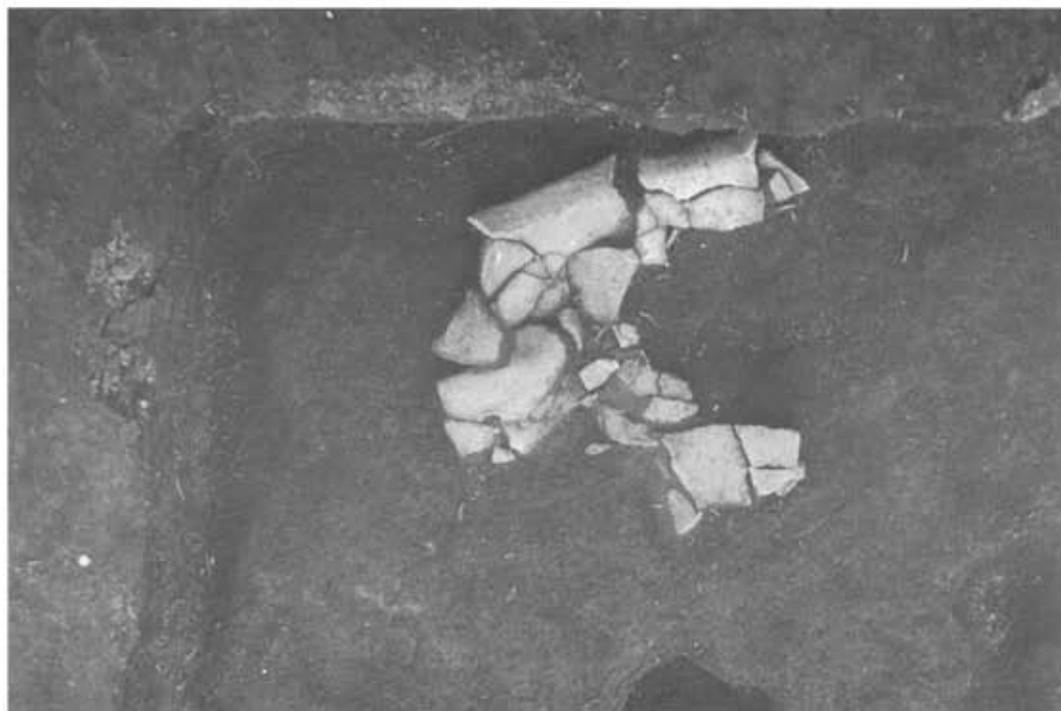
4. 第6号住居址土器出土状况 (1)



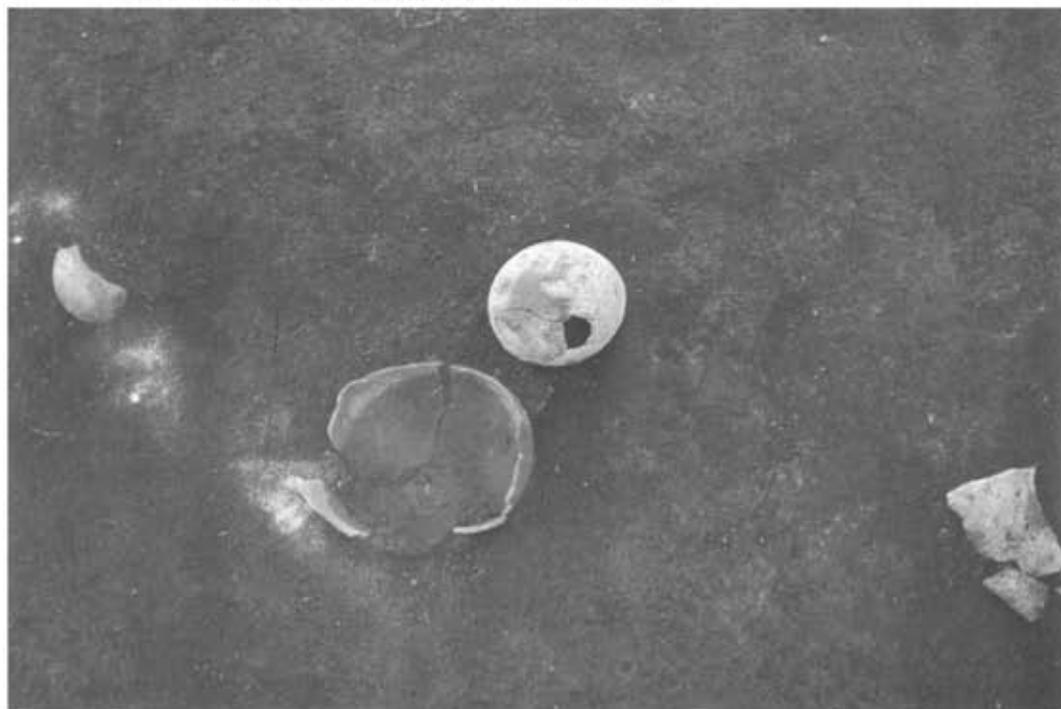
5. 第6号住居址土器出土状况 (2)



6. 第6号住居址土器出土状况 (3) 東北壁



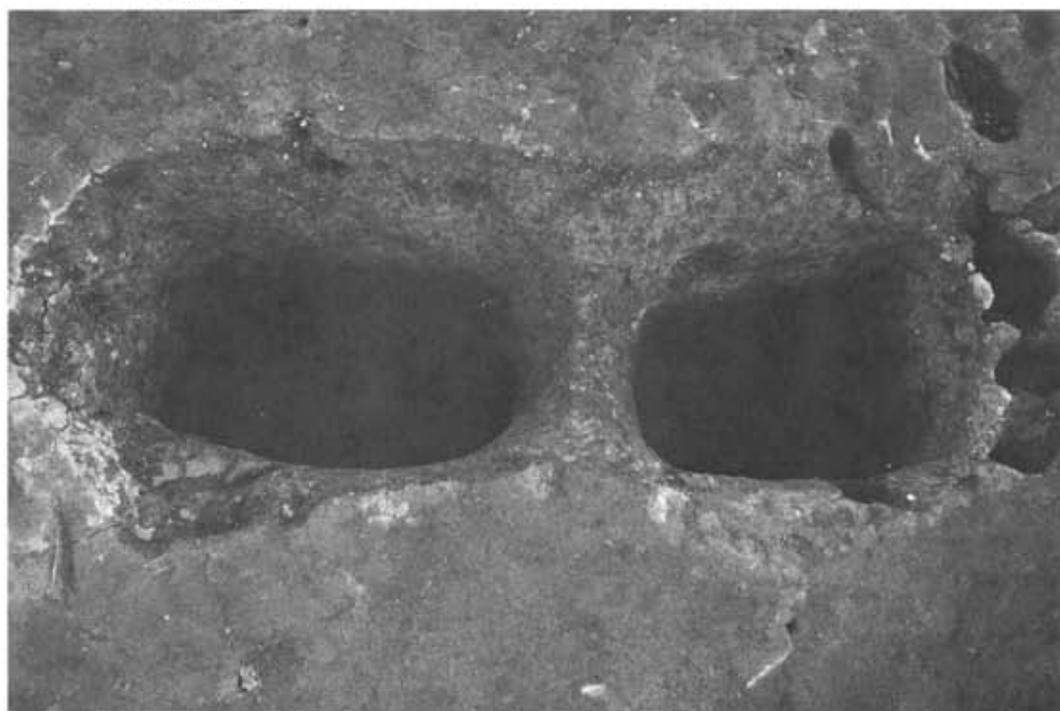
7. 第6号住居址土器出土状况 (4) 床中央部



8. 第6号住居址土器出土状況 (5) 東壁



9. 貯藏穴



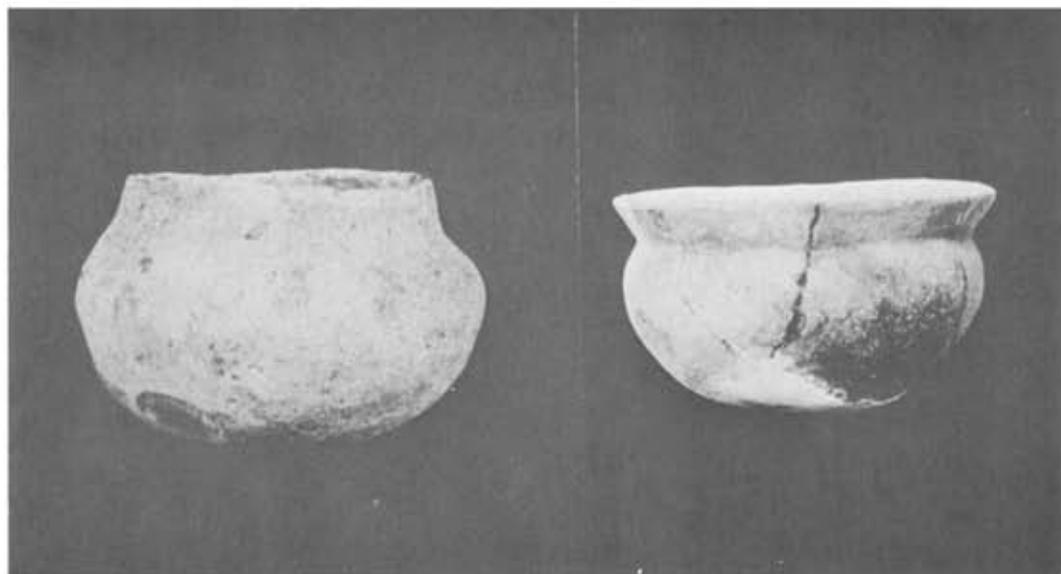
10. 甕形土器 (1) 第6号住居址出土



11. 壺形土器 (4)



12. 壺形土器 (6) 第6号住居址出土

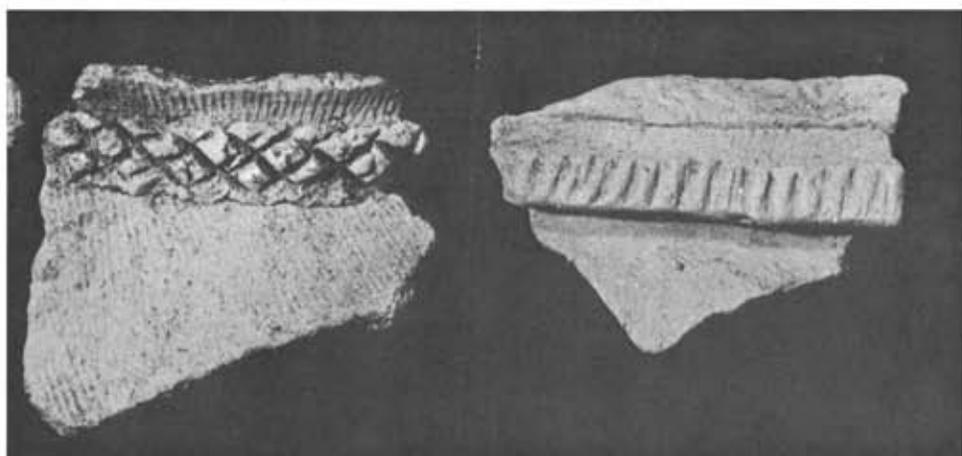


13. 壺形土器 (7)

14. 壺形土器 (8)



15. 壺形土器 (9) 第6号住居址出土

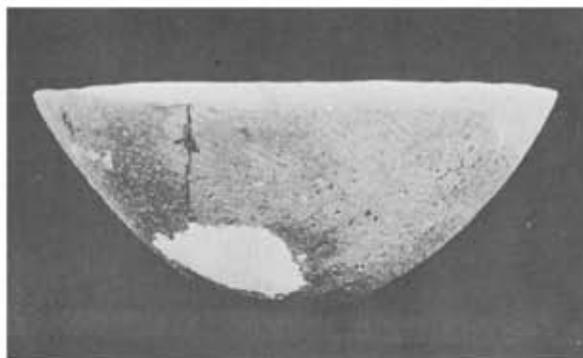


16. 壺形土器 (10)

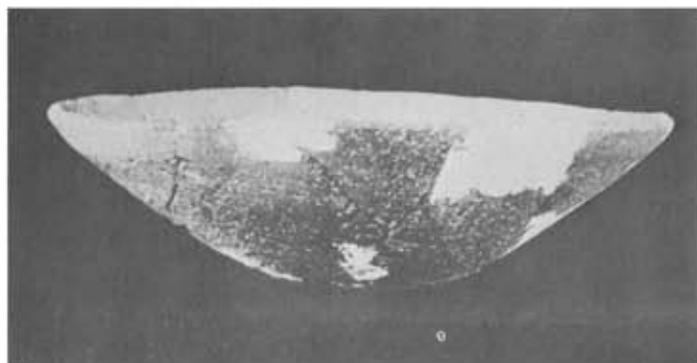


17. 鉢形土器 (11)

18. 鉢形土器 (12)



19. 鉢形土器 (13)



20. 坏形土器 (14)



第6号住居址出土



21. 高环形土器 (15)



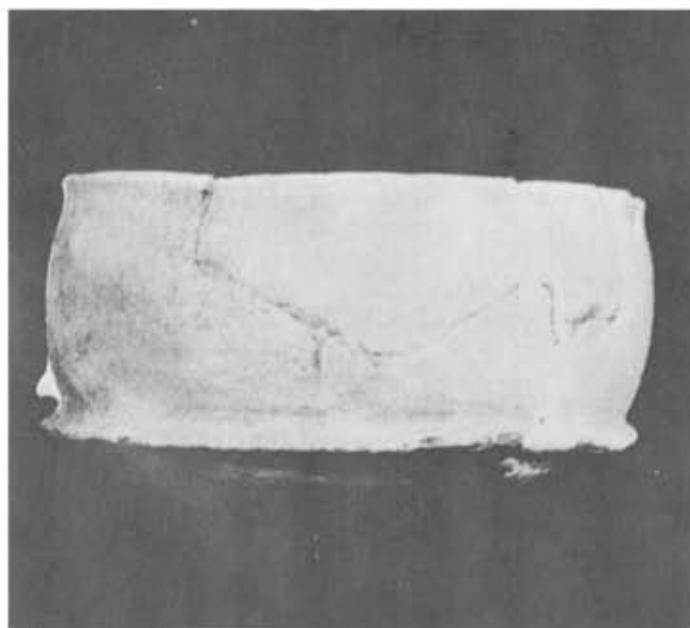
22. 器台形土器 (16) 第6号住居址出土



23. 器台形土器 (17)



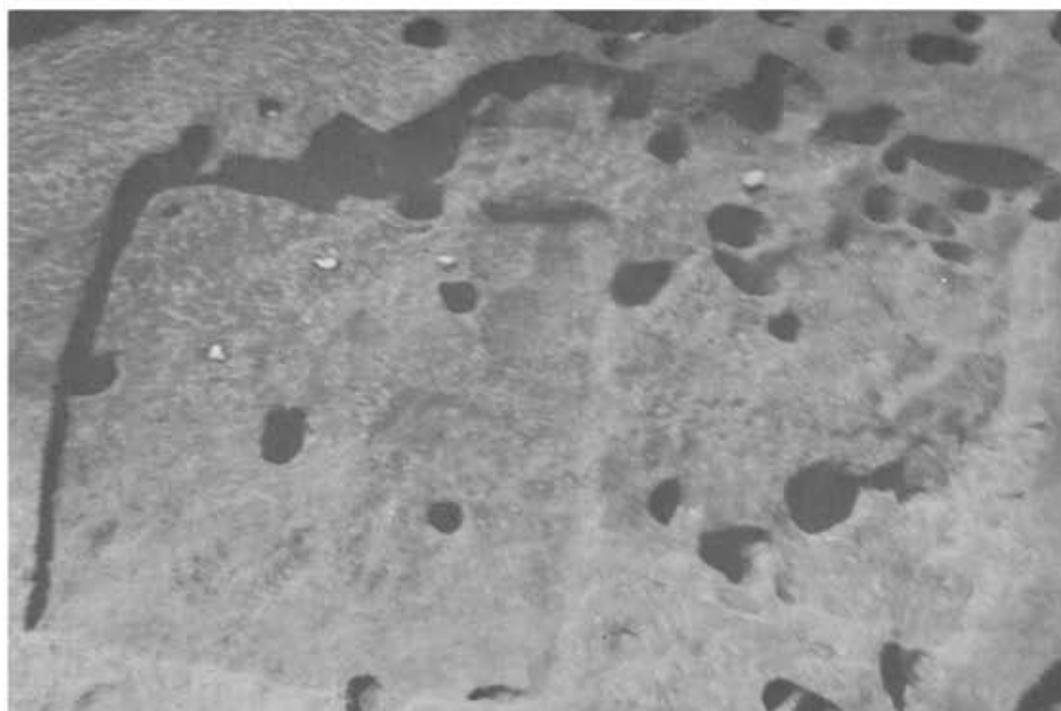
24. 鍋形土器 (18)



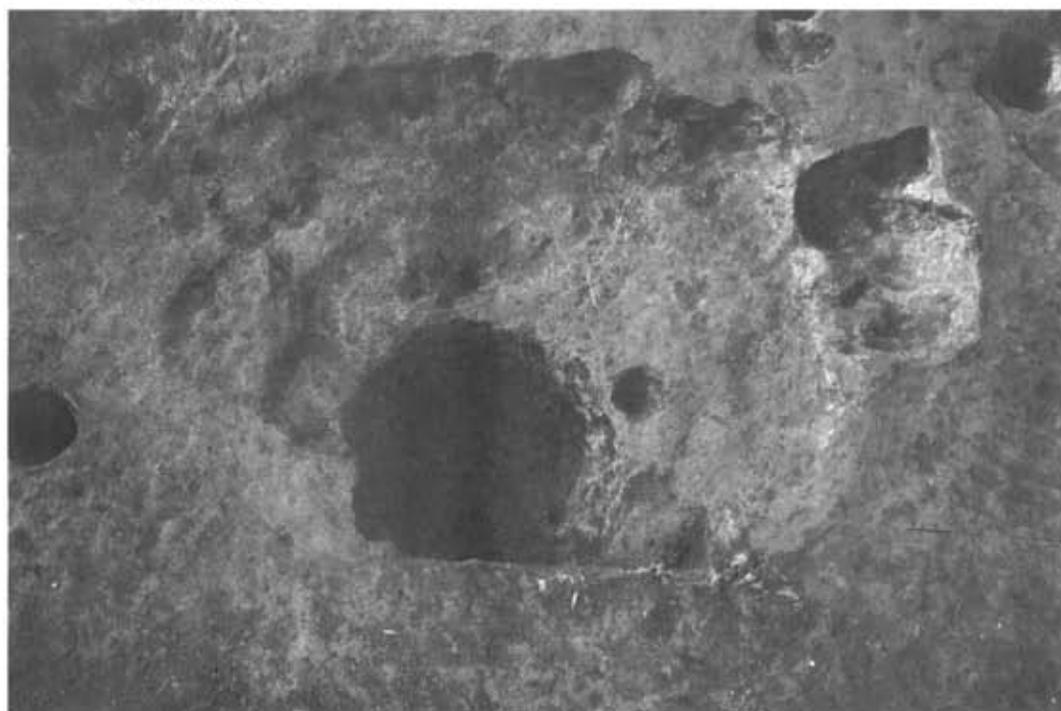


25. B区より望む（国道34号線・手前福岡）

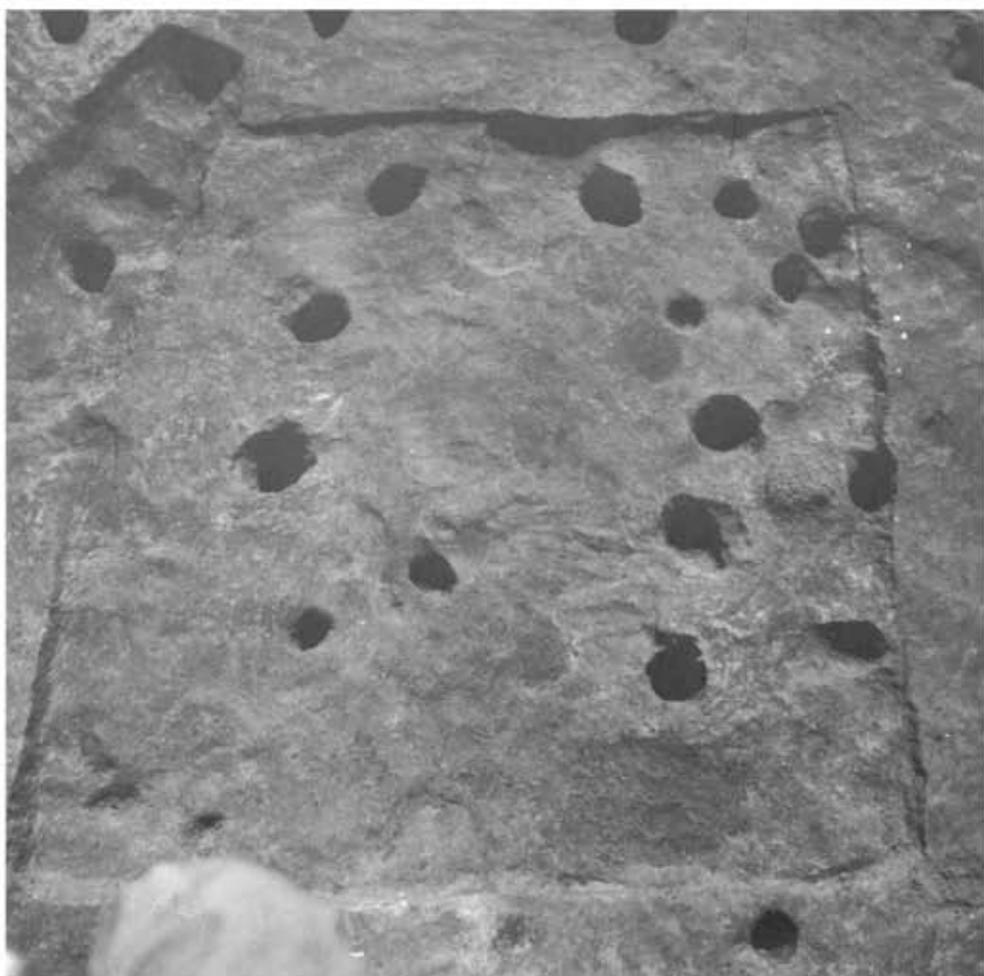
26. 第7・8号住居址



27. 土塚2



28. 第10号住居址



調査風景 (1)



調査風景 (2) 第6号住居址の調査



本川原遺跡発掘調査現地説明会



あ と が き

- ★ 昭和49年11月26日本川原遺跡において鏡山猛・七田忠志県文化財専門委員による調査委員会がもたれ、第6号住居址の学術的重要性に依り保存の要望が出され、検討を加えた後県教委と建設省との協議により、覆土による永久保存を行なうことになった。
- ★ 11月30日（土）本川原遺跡において、出土遺物・遺構等について現地説明会を開催。多数の参観者があった。
- ★ 本報告書の作成スタッフは次の通りである。

写真関係	木下 巧
実測図関係	天本 洋一
執筆・編集	木下 巧
監 修	木下之治

佐賀県文化財調査報告書第32集

本川原遺跡

印刷 昭和50年2月25日

発行 昭和50年2月28日

編集 佐賀県県教育庁文化課

発行 佐賀県教育委員会

建設省佐賀国道工事々務所

印刷 合資会社音成印刷所

